

394  
236



大坂之部

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 15 20 1 2 3 4 5

始





394-236



鎌田春雄著

近畿墓跡考

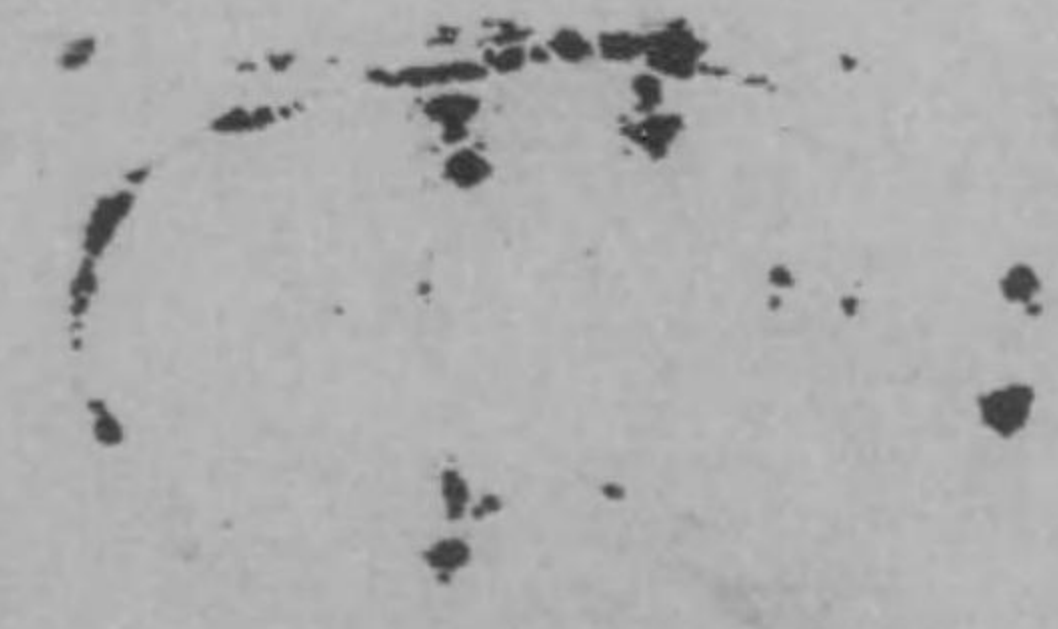
大阪の部

株式會社

大鐙閣刊

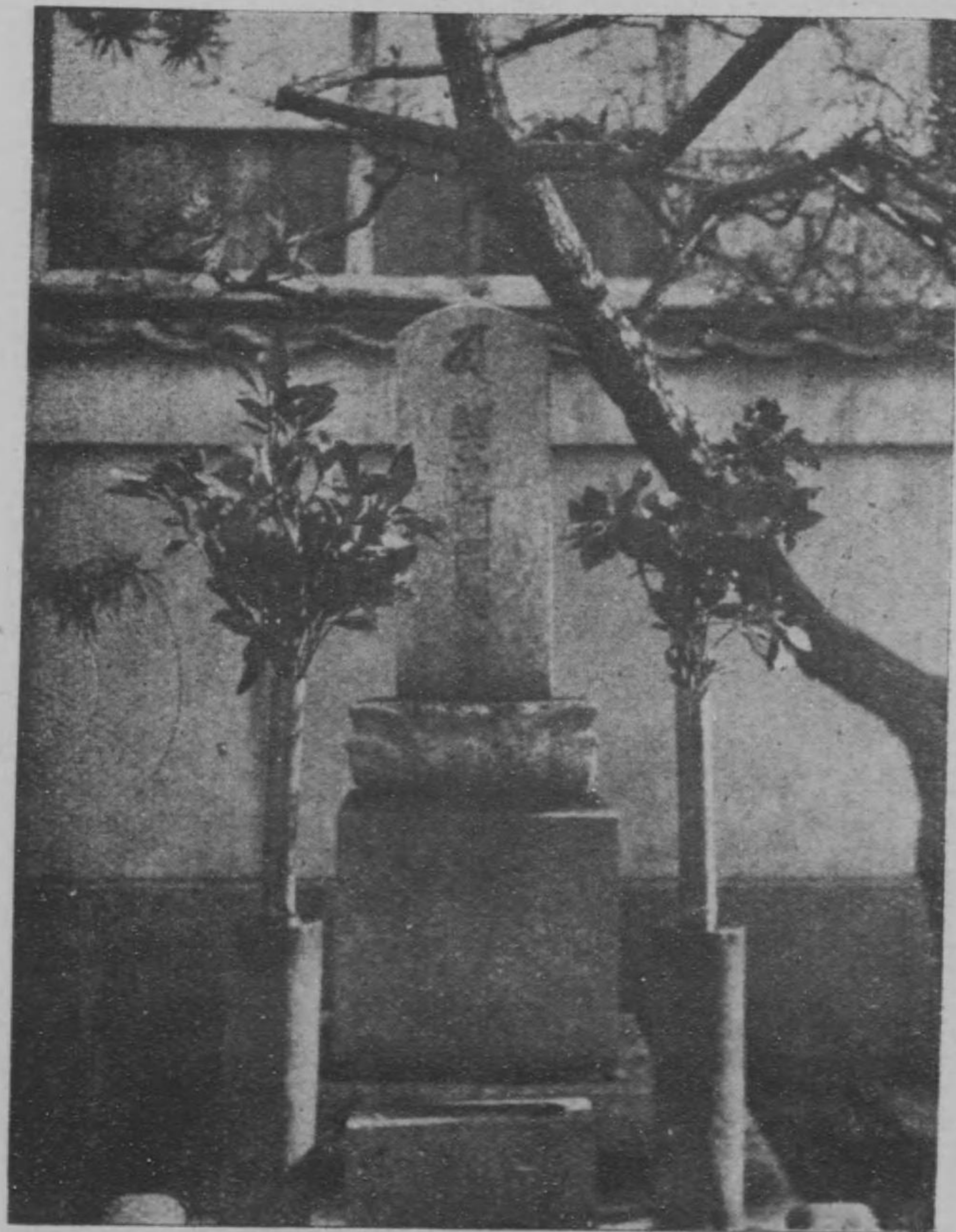


394-236





第一圖



契沖阿園梨

掩淚別鄉里。  
茫茫綠野中。  
驅馬上丘隴。  
風吹棠梨花。  
古墓何代人。  
化作路傍土。  
感彼忽自悟。

飄飄將遠行。  
春盡孤客情。  
高低路不平。  
啼鳥時一聲。  
不知姓與名。  
年年春草生。  
今我何營營。

——白居易——



## 序

十五年前、亡き母戀しの念に堪へて、寺町の墓所を逍遙ひ始めてから、いつの程にか、わたくしは古への樗軒道人のあさをたどる墓癖の一人となつてゐた。十数町につゞく寺町の眞夏の晝さがり、深夜のやうな静寂の中に立つて、盆燈籠が本堂の前に吊されてゐるのを垣間見るとき、すぐ怪談牡丹燈籠が聯想されて、幼い頃のわたくしは、魂も消ゆるばかりに、慄えたものであつた。その寺々が、二十を過ぐる頃のわたくしには、かへつて全く親しい處になつてしまつた。幾十幾百と竝ぶ墓碑を見わたして、親しい人々よといつては徐に帽子をさつたり、一々の碑の前に跪いて、小さな花を手向けたりするやうになつては、夕鴉の聲も、寒月の光も、こゝにはふさはしく又なつかしいものとして感ぜられた。まことや、人は死の一關を隔て、相對する時、生者はたゞあはれといふ一念に包容せられて、その醜をすて、たゞ美に、その惡をのぞいてたゞ善に、心ひかされるのである。さればあらゆる善をさり、あらゆる美を見ようとする望は、墓癖の人の胸に、おのづからはぐくまれてゆくのではなからうか。故人はわたくしの懐に於て常に生きてゐる。麻田剛立の墓が淨春寺にあり、能谷直好の墓が西念寺にあるといふよりは、むしろ剛立は淨



春寺に住み、直好の庵は西念寺にあるといつたやうな心地がする。地下の故人が大小をたばきんだ七儒の姿で、わたくしと話しあひ、共に電車に乗つたといふやうな夢を見たり、某氏の墓をたづねめぐんでゐた折柄、某處にありさあきらかな託宣を得た夢を見たりした。かうした間に得たものが此の一卷である。點鬼簿といふよりもわたくしの尊い金蘭簿といひたい。私人の金蘭簿を公表するのはなにかしいが、その人々が徳川期に於ける大阪文化の恩人であつて、然もその墓碑がほさんご全部無縁である悲しさ、或は近く埋滅せよせぬかこいふ恐れから、筐底に秘めて置くよりはさ思つたに過ぎない。幸に今日世に出ることになつたが、脱稿當時は既に五年を経てゐることゝ、十分追加訂正の點はありながら、閑を得ない爲に、今はその儘として置く。わたくしは大阪に生れた。郷土を愛する念は敢て人後に落ちない覺悟でゐる。偶然のことから墓碑を得た。こゝにも一層の徹底を望んでゐる。此の小さな冊子を機縁として、諸卿の指導を仰ぐことを得ば限りない満足である。

大正十一年夏

神戸の客寓にて

鎌田春雄

## 凡例

一、大阪名家の墓碑、決して本書に於て盡きたるに非ず、浪華名家墓所記所載の如きは、人名凡六百八、其の内、墓所を明記せるもの四百三十五名有り、然れども、その古昔に存して、今日所在を明にせざるもの甚多數なり、余の調べて其の現存を確めたるも、さまでの人と思はれざるは、意を以て略きつ。又其の傳を明にせむとして之を得ず、墓所と碑とを知らながら、此處に載せざるもあり、唯此の書網羅する所、所謂著名なる人々に於ては之を逸せざらんか。余の業は此に終ふるにあらず、之を一期として更に深く博く探査せむと欲するなり。博雅の士希くは示教を吝み給はざらむことを。

一、書中の墓碑、慶應を以て限り、明治以後を取らぬは、余の意、もと墓所の埋滅、特に墓碕の壞廢を恐るゝに在りて、明治以後のは多く故人の子孫、弟子、友人等の現存するあり、香華また絶えざるあれば必ずしも今日記録に存するの要なかるべしと思ひたればなり。

一、墓碑を記すに、其の所在と形式とを明にし、石質、寸法等を細示したるは、他日或は埋滅の運にあふを恐れて、探査に便を與へむと欲してなり。

但、形式を説くに於て十分ならず、五輪塔、寶篋印塔等は、特種の形あるを以て明なれど、所謂位牌形は、その種類數多ありて、或は頂の扁平なるあり、圓きあり、蓮瓣形なるあり、或は側面の厚きあり、薄きあり、一々に別ちて名稱を附するの煩に堪へず、凡て方碑といひ、角碑といふものを、此の名稱下



に収めたるなり。石質もまた細別するの智識なきが故に、漫然見る所に就て述べたり。

一、刻文は一々碑に就て摹寫したるものにして、其の文字の漫漶して讀み難きものは、□印を以て之を闕く、又碑上の文字は缺損したるも、諸家の文集、其の他に依て明にするを得たるは、之を補ひて記し置きたり。刻文の見易からんが爲に、妄りに句讀を施したるは、或は識者の譏笑を得むこと恐る。碑の左右側面は、碑を本位にして述べたるものにして、即ち書中右側面といふは、向つて左側に相當するなり。刻文の正確なる記録は本書の主眼とする所なり。

一、略傳は正確を期して、諸書を渉獵せしも、良書を見ること少く、多くは碑文の直譯に終りたり。而も其の間、碑文中に其の辭なきも、他書にありて正しと信じたるは之を記し、却つて碑文より取るを略したるもあり。傳記の出據は、一々擧ぐるに難く、時に二三その所據を註し置くのみせり。碑文には由來談辭多し、各家の正傳は、必ず他の史料の參看に俟たざるべからず。

一、巻尾附するに墓所檢索を以てしたるは、専ら展墓者の便を計りたるものなれど、また墓碑所在の各寺院が、その保存に留意せむことを希望するの微意に外ならず。墓所略圖は、もとより道案内の爲にして忌辰年表は、諸家竝立の時代を想起せしむるの料たり。掃苔雜錄は嘗て、その大部を雜誌「歴史と地理」に載せたるものにして、興味談にすぎず。

一、本書の原稿の成りたるは、大正五年十月四日のことにして、爾來印刷所の書庫裡に在る、こゝ三年有餘、今やうやく世に出てたるなり。その間、各務文獻、間重富の從五位、五井蘭洲の正五位に、追叙せられ

たるあり、聖觀律師の墓碑の所在を失へるあるなど、本書の説く所、現状と異なるあらむも、其他巨細に亘りて、嫌らぬ節多ければ、之が改訂を他日に譲りて、今は脱稿當時の姿のままにて上梓することとしたり。

一、本書の成る、先輩の著書に負ふ所の大なるは勿論なるも、左記の諸氏は常に諸種の材料を供して、便宜を與へられたり。此に録して感謝の意を表す。

小山宗助氏。

中川幸三氏。

宇治原捨三氏。

松村光三氏。

特に本書の如き、一部好事家の間のみ求められて、一般讀書界には需要薄き刊行物を、敢へて世に問ふを快諾せられたる大鑑閣書肆、久世勇三氏、面家莊信氏の好意に關しては、余の深く感謝してやまざる所なり。



謹で此小著を  
先妣慈雲清瑞信女  
の靈前に獻ぐ

春雄



先妣平井氏稱清女篠山七族直衛之女配鎌田節堂生四男  
 一女曰春雄曰俊雄他皆天明治四十年十一月二十一日卒  
 享年三十八法諡曰慧雲清瑞信女

# 目次

了

麻田 剛立墓(寛政).....	淨春寺.....	一
附麻田立達墓(文政).....	淨春寺.....	五
有賀 長收墓(文政).....	正法寺.....	六
有賀 長基墓(天保).....	正法寺.....	七
曉鐘成第二世墓(萬延).....	妙香院.....	八
安藤 秋里墓(歿年未詳).....	梅舊院.....	一〇
↓		
稻生 恒軒墓(延寶).....	天龍院.....	三
一本亭芙蓉墓(天明).....	清水寺.....	一五



○ 飯岡 澹寧墓(寛政)……………龍淵寺……………一六

附澹寧の室 淺川於柳墓(寶曆)……………淨春寺……………一九

今北 孟道墓(寛政)……………大仙寺……………二二

入江 育齋墓(寛政)……………實相寺……………二四

入江 昌喜墓(寛政)……………梅松院……………二九

入江 石亭墓(天保)……………梅松院……………三四

一睡亭海棠墓(享和)……………清水寺……………三五

齋部 道足墓(文化)……………梅舊院……………三六

稻垣 休叟墓(文政)……………大應寺……………三九

一本亭魚鱗墓(文政)……………清水寺……………四〇

石津 亮澄墓(天保)……………圓珠庵……………四一

○ 池内 陶所墓(文久)……………大福寺……………四三

ウ

梅川忠兵衛墓(寶永)……………傳光寺……………四四

才

大岡 春卜墓(寶曆)……………光明寺……………四七

大岡 春川墓(安永)……………光明寺……………五一

大矢 尙齋墓(安永)……………淨春寺……………五四

大島 梅嶼墓(安永)……………玄徳寺……………五七

奥田 元繼墓(文化)……………一心寺……………五九

大鹽平八郎墓(天保)……………成正寺……………六一

附大鹽一家墓……………成正寺……………六三

濱村墓地……………圓通院……………六六

奥野 小山墓(安政)……………圓通院……………六六

力



勘太郎墓(延寶)	法善寺	七
紙治小春墓(享保)	大長寺	七一
海北若冲墓(寶曆)	無量寺	七二
菅甘谷墓(明和)	舍利寺	七四
河野恕齋墓(安永)	光明寺	七七
葛子明墓(安永)	大蓮寺	八一
萱野錢塘墓(天明)	法雲寺	八四
萱野謙堂墓(文化)	法雲寺	八七
葛子琴墓(天明)	栗東寺	九一
片山北海墓(寛政)	梅松院	九五
金谷三石墓(寛政)	正通院	一〇〇
金谷興詩墓(天保)	正通院	一〇三

加藤竹里墓(寛政)	珊瑚寺	一〇五
附加藤禹門(寶曆)	珊瑚寺	一〇八
加藤棠齋(文化)	珊瑚寺	一〇八
岳玉淵墓(寛政)	禪林寺	一〇
桂田龍山墓(文化)	天然寺	一四
香川氷仙墓(文化)	大應寺	一七
各務文獻墓(文政)	淨春寺	一八
香川琴橋墓(嘉永)	蟠龍寺	二一
金子雪操墓(安政)	清壽院	二三

キ

北山壽安墓(元祿)	太平寺	二四
紀海音墓(寛保)	寶樹寺	二六
玉雲齋貞右墓(寛政)	一心寺	二九



木村 巽齋墓(享和).....大應寺.....一三三  
 衣川 長秋墓(文政).....圓珠庵.....一三七  
 北尾 墨香墓(嘉永).....天龍院.....一四〇

ク  
 花月庵鶴翁墓(嘉永).....邦福寺.....一四二  
 黒澤 翁滿墓(安政).....珊瑚寺.....一四四  
 熊谷 直好墓(文久).....西念寺.....一四六

ケ  
 契沖阿闍梨墓(元祿).....圓珠庵.....一四八  
 兄 樂 郊墓(明和).....妙德寺.....一五二  
 月下庵廉山墓(安永).....一心寺.....一五三

コ

小西 來山墓(享保).....海泉寺.....一五五  
 五井 持軒墓(享保).....九品寺.....一五八  
 附五井禪久墓(歿年未詳).....九品寺.....一六三  
 五井 蘭洲墓(寶曆).....實相寺.....一六三  
 小山 伯鳳墓(安永).....重願寺.....一六九  
 附小山仲鴉墓(天明).....重願寺.....一七三  
 小柴 景山墓(享和).....善龍寺.....一七四  
 五竹庵木僊墓(文化).....清壽寺院.....一七五  
 小島 杉山墓(弘化).....禪林寺.....一七七  
 後藤 松陰墓(元治).....天德寺.....一八〇  
 附後藤箕山(文久).....天德寺.....一八一  
 附後藤桐坪(慶應).....天德寺.....一八一  
 吳 北 渚墓(文久).....金臺寺.....一八二



寒川 辰清墓(元文).....	瑞龍寺.....	一八四
佐々木志頭磨墓(寛保).....	濱村墓地.....	一八六
澤井 穿石墓(安永).....	法雲寺.....	一八九
坂本 鼎齋墓(萬延).....	大倫寺.....	一九二
齋藤 鑾江墓(嘉永).....	濱村墓地.....	一九六
齋藤 方策墓(嘉永).....	梅舊院.....	二〇〇
附齋藤石城墓(天保).....	梅舊院.....	二〇一
シ		
白井 道順墓(正徳).....	吉祥寺.....	二〇三
澁井 太室墓(天明).....	玄徳寺.....	二〇七
蔀 關月墓(寛政).....	正通院.....	二一一

聖觀 律師墓(享和).....	味原池畔.....	二二四
篠崎 三島墓(文化).....	天徳寺.....	二二七
篠崎 小竹墓(嘉永).....	天徳寺.....	二三〇
附篠崎竹陰墓(安政).....	天徳寺.....	二三六
ス		
薄田 兼相墓(元和).....	増福寺.....	二二七
菅沼 東郭墓(寶曆).....	寒山寺.....	二二九
墨江 武禪墓(文化).....	妙福寺.....	二三一

リ

曾谷 應聖墓(寛政).....	天然寺.....	二三三
夕		
鯛屋 貞因墓(元祿).....	寶樹寺.....	二三六



鯛屋 貞柳墓(享保)……………清水寺……………二三七  
 竹本義大夫墓(正徳)……………超願寺……………二三九  
 竹田 出雲墓(寶曆)……………青蓮寺……………二四一  
 田中 鳴門墓(天明)……………邦福寺……………二四四  
 高橋<sup>多一郎</sup> 庄右衛門(文政)……………四天王寺……………二四六  
 武内 確齋墓(文政)……………傳長寺……………二五一  
 大黒庵奇淵墓(天保)……………寶樹寺……………二五四  
 田能村竹田墓(天保)……………淨春寺……………二五五  
 高橋 殘夢墓(嘉永)……………專念寺……………二五七  
 田中 秋亭墓(安政)……………清水寺……………二五九  
 田中 金峯墓(文久)……………妙壽寺……………二六一

子

近松門左衛門墓(享保)……………法妙寺……………二六五

ツ

衛 茅山墓(明和)……………瑞龍寺……………二六七

テ

鐵眼 和尚墓(天和)……………瑞龍寺……………二七三

ト

富島 瑞峯墓(正徳)……………濱村墓地……………二七四  
 富永 芳春墓(元文)……………西照寺……………二七六  
 鳥山 崧岳墓(安永)……………珊瑚寺……………二七八  
 十時 梅厓墓(文化)……………正念寺……………二七九

ナ

中江 岷山墓(享保)……………一心寺……………二八一



永井 如瓶墓(享保)	源聖寺	二八四
中井 登庵墓(寶曆)	誓願寺	二八七
中井 竹山墓(文化)	誓願寺	二九二
中井 履軒墓(文化)	誓願寺	二九四
中井 蕉園墓(享和)	誓願寺	二九六
中島 貫齋墓(寶曆)	禪林寺	二九八
永富 獨嘯庵墓(明和)	藏鷺庵	三〇一
長島 廉齋墓(文政)	實相寺	三〇五
中井 方明墓(天保)	一心寺	三〇六
中雄 次輔墓(天保)	邦福寺	三〇九
附中雄順平墓(天保)	邦福寺	三一

西山 宗因墓(天和)	西福寺	三二
丹羽 桃溪墓(文政)	圓通寺	三三五
西島 是平墓(文政)	西光院	三三七
二東 生穉墓(萬延)	九品寺	三三〇

八

蜂須賀正勝墓(天正)	舊國恩寺	三三三
原元辰母子墓(元祿)	長久寺	三三五
秦 竹探墓(享保)	重願寺	三三九
伴 存誠墓(享保)	誓願寺	三三〇
早野 仰齋墓(寛政)	隆專寺	三三一
早野 反求墓(天保)	隆專寺	三三二
早野 思齋墓(歿年未詳)	隆專寺	三三三



林 淡齋墓(寛政).....	太平寺.....	三三四
濱田 杏堂墓(文化).....	法雲寺.....	三三六
間 長涯墓(文化).....	邦福寺.....	三三八
附間 五鳳(明和).....	邦福寺.....	三四〇
附間 確齋(歿年未詳).....	邦福寺.....	三四〇
華岡 鹿城墓(文政).....	圓珠庵.....	三四一
華岡 南洋墓(慶應).....	圓珠庵.....	三四四
放雀庵長齋墓(文政).....	蓮興寺.....	三四七
春田 横塘墓(文政).....	淨春寺.....	三四九
春名 柳窓墓(文政).....	清壽院.....	三五一
原 老柳墓(安政).....	齡延寺.....	三五二
八千坊舍持墓(安政).....	瑞龍寺.....	三五四
萩原 廣道墓(文久).....	妙壽寺.....	三五五

七

尾藤 温洲墓(安永).....	長樂寺.....	三五六
廣瀨 筑梁墓(天保).....	本傳寺.....	三五八
廣瀨 旭莊墓(文久).....	邦福寺.....	三六一
平賀 中南墓(歿年未詳).....	邦福寺.....	三六三

フ

古林 見宜墓(明曆).....	禪林寺.....	三六四
古林 荆南墓(寛政).....	禪林寺.....	三六六
福原 三洞墓(寛政).....	瑞龍寺.....	三七〇
不二 庵墓(享和).....	梅舊院.....	三七一
福田貫通齋墓(安政).....	傳光寺.....	三七四
藤澤 東畎墓(元治).....	齡延寺.....	三七七



藤井 藍田墓(慶應).....邦福寺.....三六〇

ホ

本多 忠朝墓(元和).....一心寺.....三八四

堀田 自諾墓(享保).....本傳寺.....三八五

細合 半齋墓(享和).....法樂寺.....三八八

保科嘉一郎墓(文政).....淨春寺.....三九一

マ

松木 淡々墓(寶曆).....瑞龍寺.....三九二

眞勢 中州墓(文化).....寒山寺.....三九四

松本 乾知墓(天保).....銀山寺.....三九五

蒔田 雁門墓(嘉永).....東光院.....三九七

ミ

三井 眉山墓(天明).....淨春寺.....三九八

三井 棗洲墓(天保).....淨春寺.....四〇一

附黒木可亭墓(文政).....淨春寺.....四〇三

水野 南北墓(天保).....法輪寺.....四〇四

三浦 道齋墓(萬延).....大仙寺.....四〇五

三瓶 信庵墓(文久).....重願寺.....四〇八

ム

村田 春門墓(天保).....邦福寺.....四〇九

村田 嘉言墓(嘉永).....邦福寺.....四一一

モ

森 狙仙墓(文政).....西福寺.....四二二

森 周峯墓(文政).....西福寺.....四二三



森 徹山墓(天保).....西福寺.....四二四  
 森川 竹窓墓(天保).....大應寺.....四二六  
 附香川芝園墓(文化).....大應寺.....四二七

ヤ

安井 道頓墓(慶長).....松林庵.....四一八  
 矢頭 長助墓(元祿).....淨祐寺.....四二〇  
 附矢頭右衛門七墓(元祿).....東福寺別院.....四二三  
 山本 大定墓(元文).....濱村墓地.....四二五  
 山中 宗房墓(寶曆).....顯孝庵.....四二八  
 八木 巽處墓(天保).....大應寺.....四二九  
 藪 鶴堂墓(嘉永).....梅松院.....四三〇

ユ

夕 霧墓(延寶).....淨國寺.....四三二

ヨ

淀屋 个庵墓(寛永).....大仙寺.....四三四  
 吉田 盈枝墓(明和).....邦福寺.....四三五  
 依田新八郎墓(享和).....一心寺.....四三七  
 吉益 恬庵墓(弘化).....淨春寺.....四三九

リ

劉 琴溪墓(文政).....妙德寺.....四四二

ル

留守 退藏墓(明和).....淨春寺.....四四三

ワ

椀久 松山墓(延寶).....實相寺.....四四六



渡邊 長城墓(文政).....傳長寺.....四四七

井

井上 眞改墓(天和).....重願寺.....四五〇

井原 西鶴墓(元祿).....誓願寺.....四五二

井邨 圭屑墓(天明).....竹林寺.....四五四

工

遠城治左衛門墓(正徳).....崇禪寺.....四五七  
安藤喜八郎墓(正徳).....崇禪寺.....四五七

子

岡本 蘭齋墓(寶曆).....齡延寺.....四九九

附岡本尙古齋墓(安永).....齡延寺.....四六一

小野 好純墓(寶曆).....淨春寺.....四六四

岡橋 魯直墓(明和).....圓通寺.....四六五

尾崎 散木墓(安永).....淨春寺.....四六八

岡田米山人墓(文政).....良專庵.....四七一

岡田 半江墓(弘化).....良專庵.....四七一

越智 高洲墓(文政).....梅松院.....四七三

尾崎 雅嘉墓(文政).....春陽軒.....四七五

岡 琴嶽墓(天保).....邦福寺.....四七六

岡 熊岳墓(天保).....邦福寺.....四七八

長田 鶴夫墓(弘化).....雲雷寺.....四七九

小山田靖齋墓(嘉永).....梅舊院.....四八一

掃苔 雜錄.....四八三

墓所 檢索.....五〇五

忌辰 年表.....五二二



墓所略圖

三

挿繪目次

第一圖	契沖阿闍梨	卷首
第二圖	木村彙葭堂	四〇—四一
第三圖	井原西鶴	八八—八九
第四圖	近松門左衛門	二〇—三三
第五圖	篠崎三島	一五一—一五三
第六圖	片山北海	二〇八—二〇九
第七圖	麻田剛立	二五一—二五七
第八圖	中井履軒	三〇五—三〇六
第九圖	森狙仙	三三一—三三七
第十圖	永富獨嘯庵	三六八—三六九
第十一圖	西山宗因	四〇〇—四〇二
第十二圖	篠崎小竹	四六四—四六五



## 墓所略圖

一、圖を分ちて天満東寺町、天満西寺町、餌差町と小橋寺町、八丁目中寺町と同東寺町、上本町、西高津中寺町と谷町、生玉附近、夕陽丘町と六萬體町、下寺町の九圖とす。

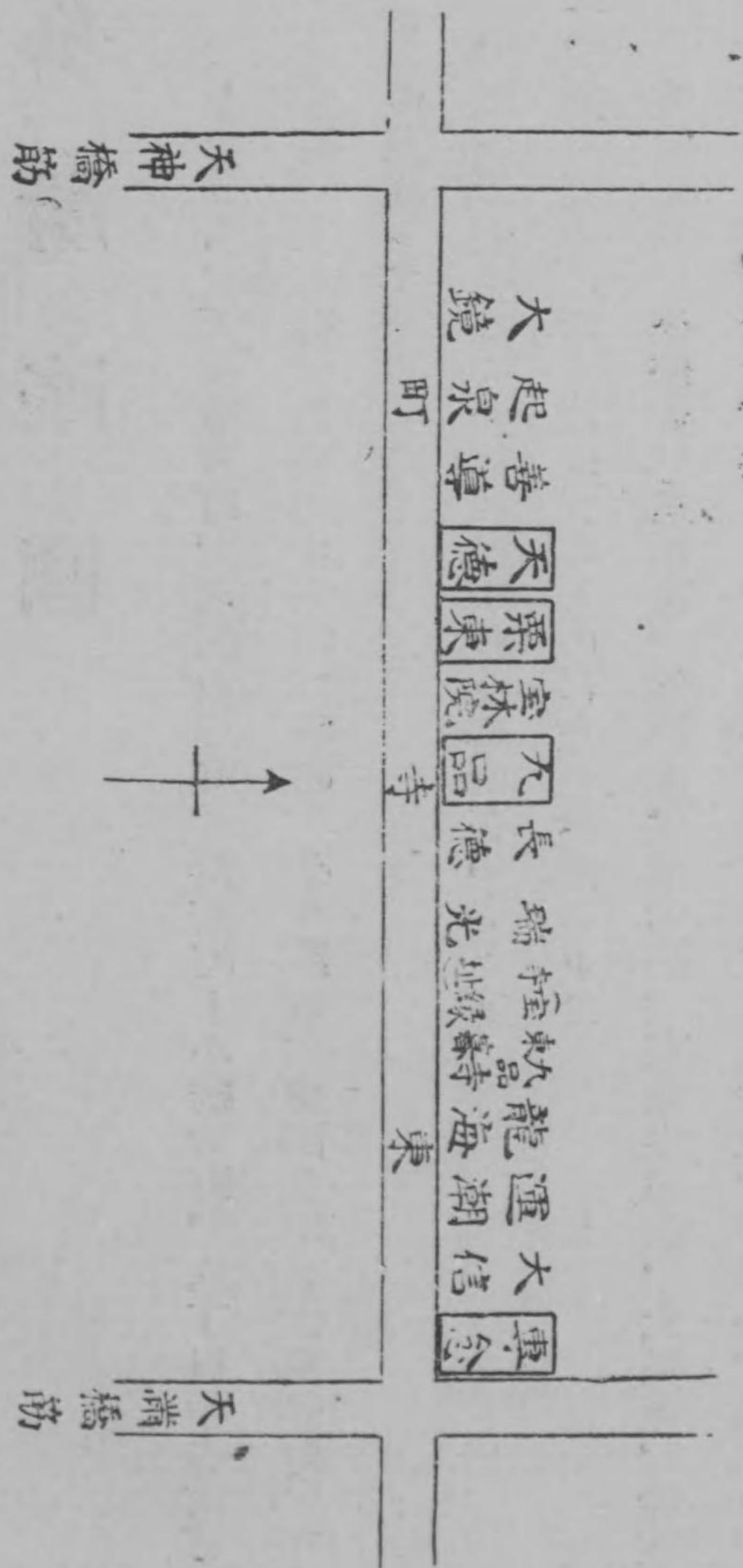
一、圖中墨劃せるものを本書所載墓碑所在の寺とす。

一、此の圖中に示す能はざるものに左の諸處あり。

濱村墓地、崇禪寺、正通院、妙壽寺、東光院、東福寺別院、大長寺、妙徳寺、淨祐寺、傳光寺、法善寺、松林庵、藏鷺庵、國恩寺址、海泉寺、清水寺、清壽院、超願寺、一心寺、四天王寺、味原池畔、邦福寺、舍利寺、法樂寺、瑞龍寺

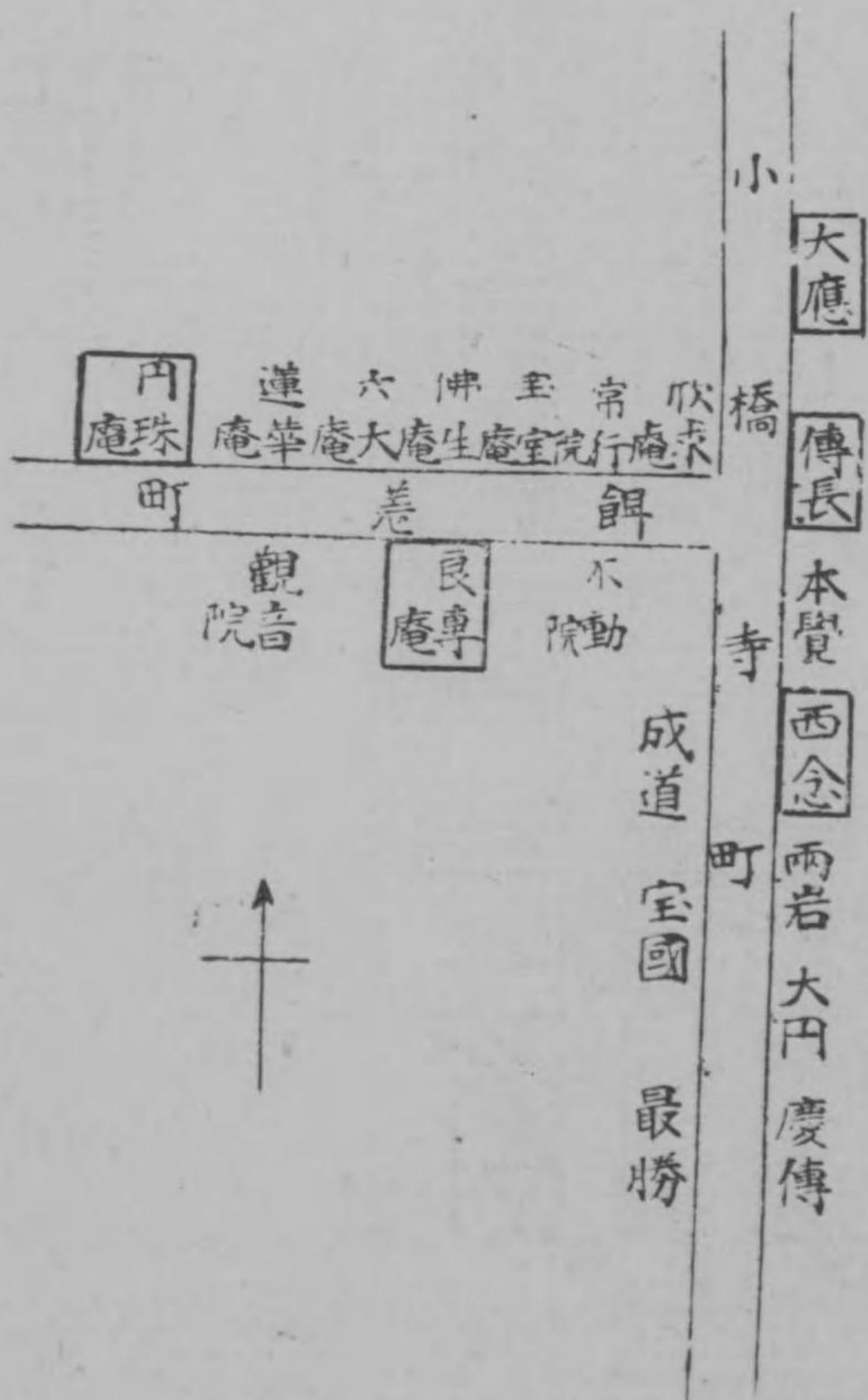


天満東寺町



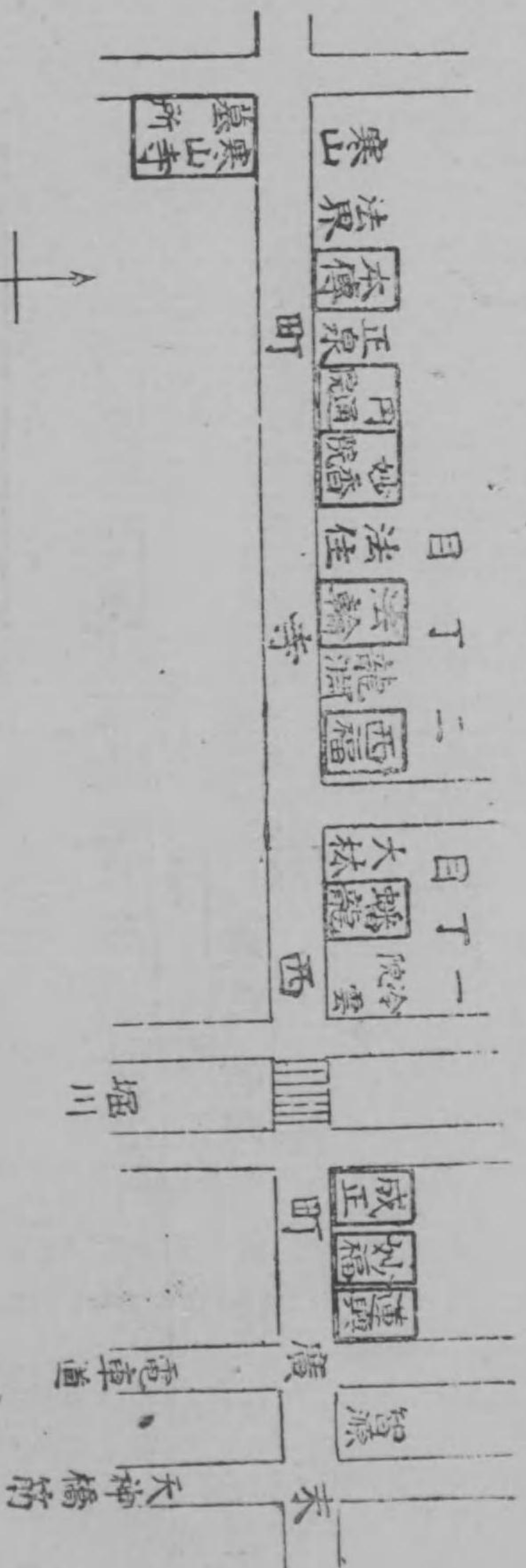
起泉は超泉、東暮は東墓の誤

餌差町と小橋寺町

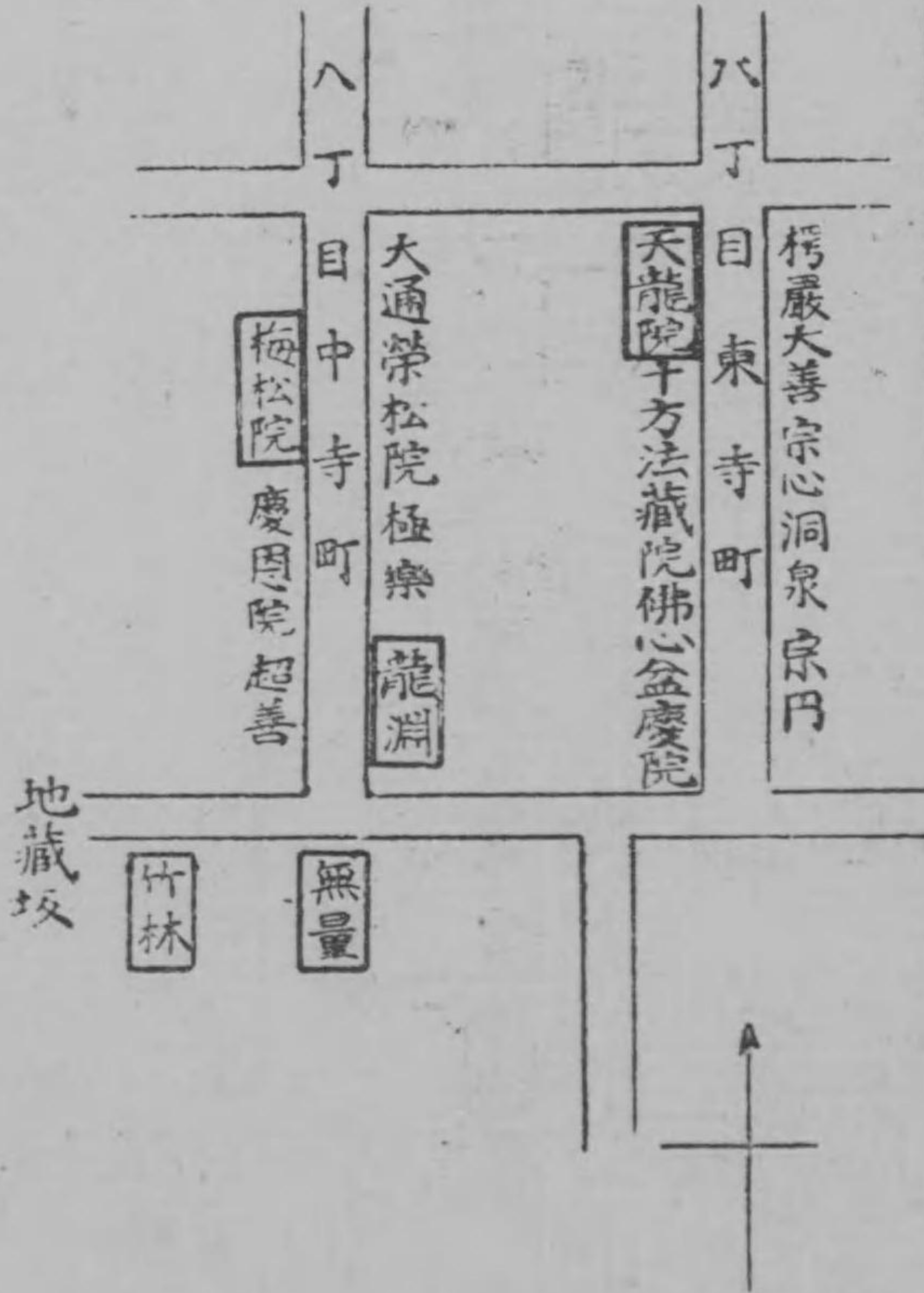




天龍院寺町



八丁目中寺町と同東寺町



盆慶院は全慶院の誤



上本町

清堀町

天然

大福

念佛

寶指

天住

上

大長

白專

誓源

願光

四丁目

本

明光

念正

妙中

了幸偏照庵白蓮寺

宝樹

大机

源正

元明は光明の誤



桑谷

地藏坂

五丁目

西海

六丁目

高津表門坂

西高津中寺町と谷町

八丁目

本照

法妙

正覺

妙光

妙法海宝

九丁目

夕顔

長久

妙經 妙像本長本政

願生

大仙

重願

藤次

本行蓮成 妙壽 宝泉 福泉 法住

西高津中寺町

雲雷

禪林

顯存庵

大倫

円妙

正法

法雲 江國本經 久成 本覺

常國

妙亮

蓮光

少林

報恩院

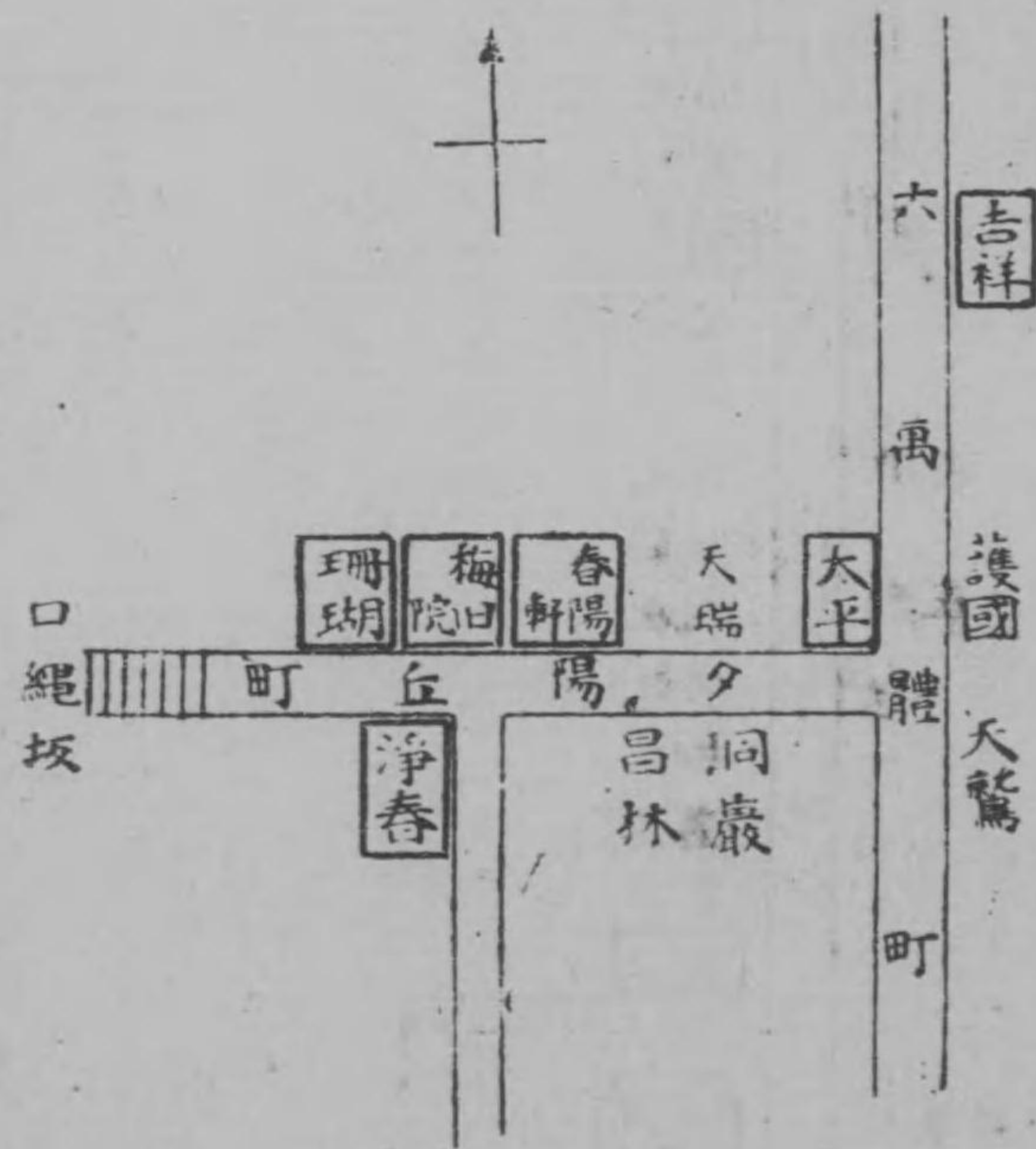
地藏坂

高津表門坂

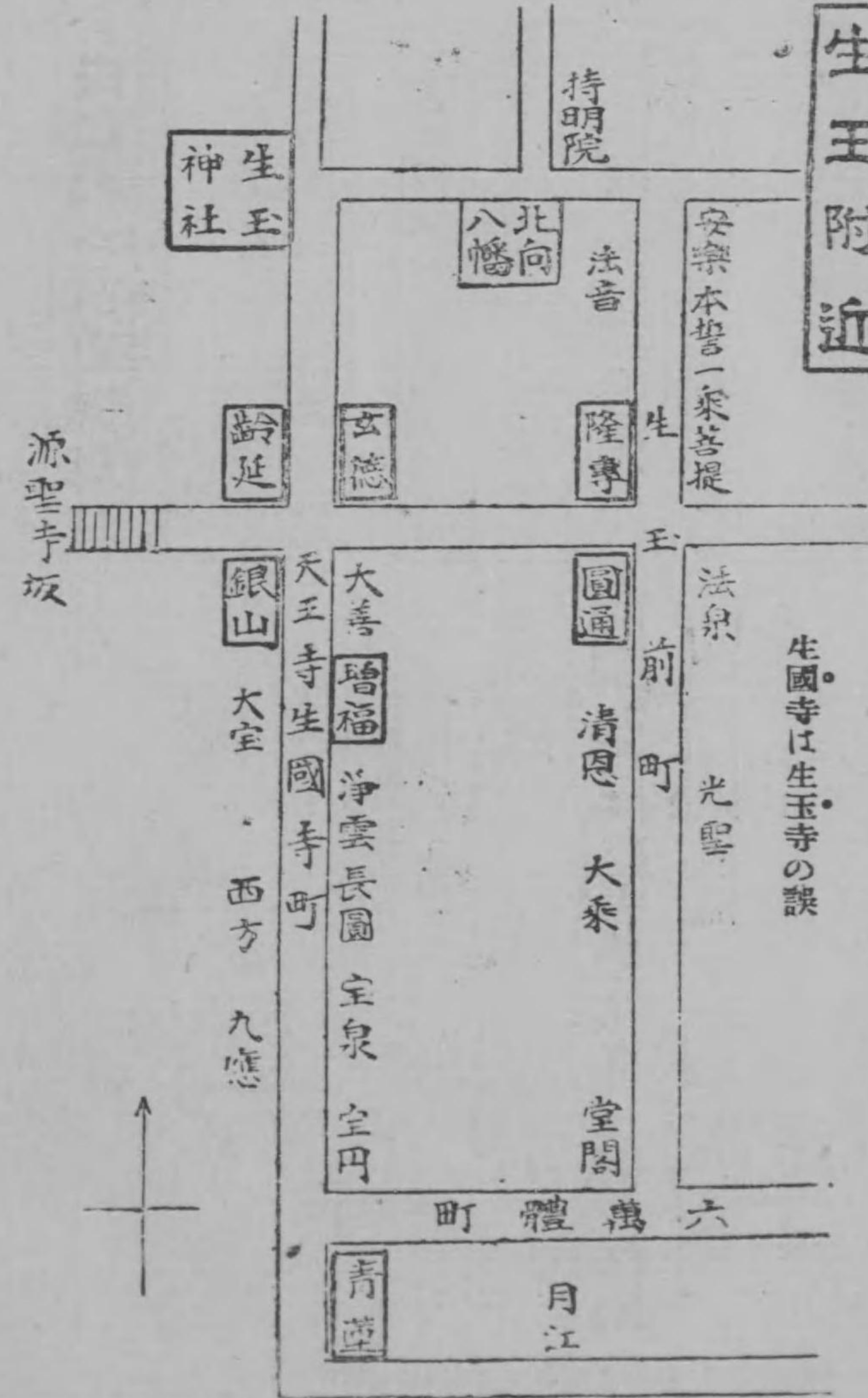




夕陽丘町と六萬體町

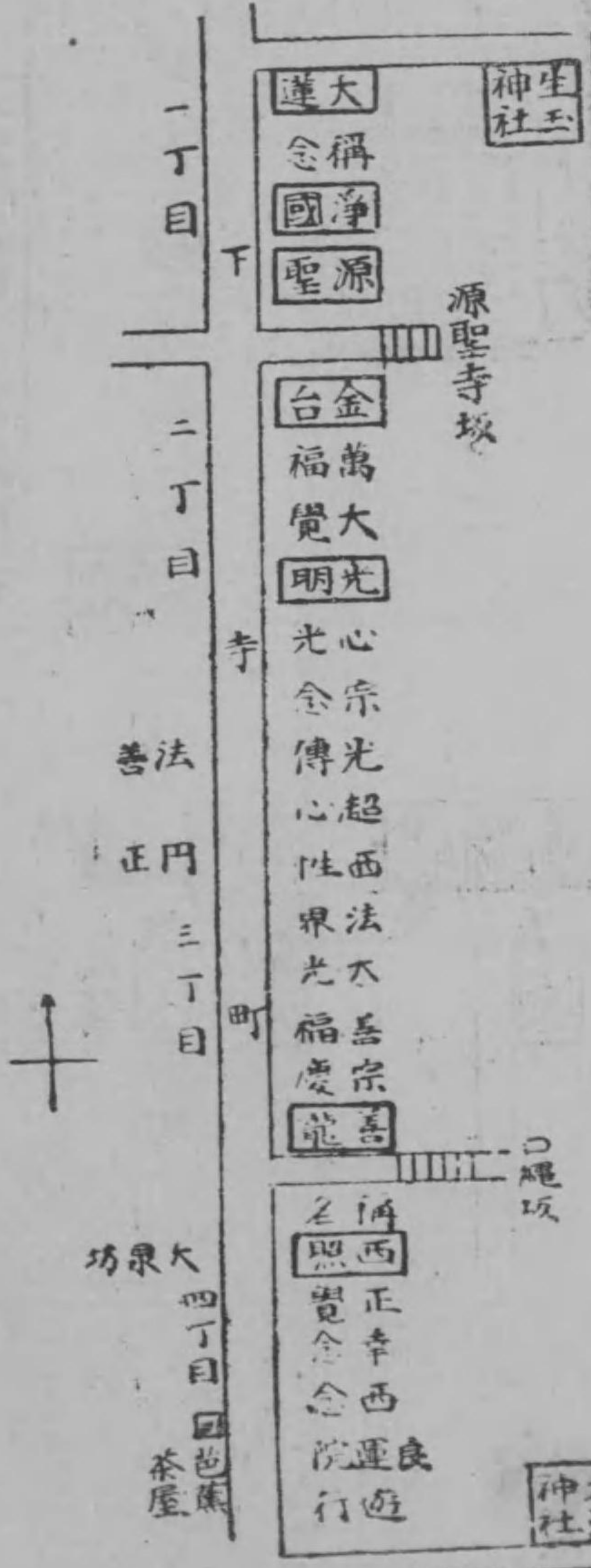


生玉附近





下寺町



近畿墓跡考

大阪之部

鎌田春雄著

麻田剛立墓

曆學

所在 南區天王寺夕陽丘町淨春寺に在り。本堂裏南手西より第二列目にありて東面す。碑文は中井蕉園の撰。谷川裕の書。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺二分。幅一尺三分。厚八寸三分。臺石二層。御影石。上高八寸七分。下高八寸二分。

刻文

剛立麻田先生之墓 (篆額)

寛政十一年五月二十二日。剛立麻田君卒。年六十六。既葬。其子直。買石誌其墓。

麻田剛立墓



其友人之子曾弘。爲之辭。曰。君諱安彰。剛立其字。原姓綾部。豐後人。自其祖父而下。世仕杵築侯。君以支子家居。嚴毅廉正。精敏絕人。最好星曆之學。又喜醫方之言。困苦勉厲二十餘年。無所師受。而大通其法。明和末。侯特命列諸侍臣。從如江戶。遂如大阪。既歸歎曰。星曆淵微。豈有爵祿之累。而能窮焉哉。且所以嗣祖先報君上。有吾宗子在。我復胡爲。上書辭仕者三。且不獲命。遂亡。更姓氏隱于大阪。以醫業其家。而益研窮于星曆。後列侯或聞其聲。厚禮以聘之。弗就。縣官亦欲起之。亦弗應。輒曰。我非棄吾君。我若復仕。舍舊君。其誰之之也。在大阪二十八年而終。星曆之法今古多端。君自少包羅既盡。而驗諸乎天。有不合者。乃知法之尙粗也。悉捨其書。別索其術。一以測量實驗爲本。或執器中庭露坐。或操觚机上分疏。酷寒毒暑。無有倦避。頭不觸枕者九年。其術用成。然後優柔浸灌。補綴磨礪者。又十餘年。凡其所驗無毫不合矣。衆服其精確。後清商船載西洋曆法之書者二種。其說奇新。密微入神。星工傳爲大寶。而君所發明論著。悉與之符矣。

若西人嚮聞君之言。而潤色之者也。衆益服焉。唯其消長求食二法。實獨步古今。雖西人不能至云。醫方之書亦多端。君自少包羅亦盡。而常試諸乎人。或得于其理焉。弗獲其功。或獲其功而不得于其理。輒歎曰。獲其功而不得于其理。我之不明也。得于其理而弗獲其功。是豈真得于理者乎哉。亦我之不明也。有斯事必有斯理。我將深討務白。竭于其理矣。然星曆之務是急。未暇專攻也。晚節星曆業成。乃曰。我今則可以專攻焉。蓋欲大有所論者也。而疾及之。繼以大故。衆莫不惜焉。祖父諱道弘。父諱安正。妻藤井氏。無子。取直以嗣。三兄曰安胤。曰安三。曰安廣。直實安胤之子。系曰。

王之曰官侯之曰御。家言是執各殊攸據。上天之載洵微且淵。彼己之子倒之顛之。君之爰與窮淵剖微。如晦之燈如夢之觸。聞其辨論如客歸鄉。維時丁巳大修堯政。令聞攸薰蒲輪將命。君罔起意乃拔其徒。其徒底績縻君矩。政人孔嘉錫覃蒞堂。群朋來慶草野之光。所謂伊人天士之望。今其逝矣誰嗣爲宗。言之不朽矧有其徒。



每有其徒奈吾癡何。郡曰東成刹曰淨春。高四尺者君之墳邪。

中井曾弘撰

谷川裕謹書（正、右、背、左四面）

略傳

名安彰。字剛立。號正庵。璋庵。原姓綾部氏。豊後杵築人。寛政十一年五月二十二日歿。年六十六。

剛立は豊後杵築藩儒綾部綱齋の第四子なり。家居獨り天文學醫學を修めて勉學すること二十餘年。別に師承無くして其の學終に同藩の先輩三浦梅園を凌駕するに至る。明和八年藩主特に命じて侍臣に列す。剛立従ひて江戸大阪に至る事を得て三都學界の狀を詳にするや。愈志を固め、爵録の累を去つて一意研鑽の途に入らん事を欲し、再三致仕を乞ひしも用ひられず、遂に出奔して大阪に隠れ、その高祖が豊後東海郡麻田村に居りしに因み姓を麻田と更め、醫を以て門戸を張り旁ら天文學を修む。獨學九年、學進んで盛名漸く高く諸侯の聘頻りなるも、皆辭して就

かず。寛政改曆の際江戸天文臺より天文方として採用の命あるや又應せず高弟高橋東岡、間長涯を遣はして命を拜せしむ。當時漢譯の西洋天文書輸入せられ學界に重きをなししが其の説剛立と殆ど暗合したりしといふ。其の發明に消長求食の二法あり。今傳らず。剛立天文學に於て已に大成の域に達し更に志を醫に専らにせん。とせしに天之に年を假さず。在阪三十八年にして死す、配藤井氏。子無し。長兄の子直、字は立達を以て嗣とす。大正五年十二月二十八日特旨を以て從四位を贈らる。

附

麻田立達墓

附麻田立達墓、亦同所に在り。剛立墓の西北にありて西面す。刻文。

俊翁立達居士（正面）

姓麻田。名直。字立達。明和八年辛卯八月二十一日生。文政十年丁亥正月四日歿

麻田剛立墓



有賀長收墓

享年五十七。(右側面)

六

有賀長收墓

國學

所在 東區西高津中寺町正法寺に在り。墓域に入る石段を下つて正北端にありて西面す。臺石前面に有賀の二字を刻む。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺四寸三分。幅九寸。厚六寸。臺石三層。御影石。上高三寸。中高九寸。下高六寸五分。

刻文

居貞齋長收之墓 (正面)

文化十五戊寅年五月七日卒 (右側面)

夫人の碑は側にありて西面す。

妙收日圓之墓 (正面)

略傳

文政九丙戌年二月二十二日卒 (右側面)

初名長因。後改長收。號居貞齋。大阪人。文政元年五月七日歿。年六十九。

長收は京都の歌人長伯を祖父とし長因を父とせる歌學者の家に生れ、長伯が眞實至純を宗とせる歌風を傳ふ。有賀家は祖父長伯以來長收の孫長隣に至る凡一百七十餘年浪華歌壇に盛名を擅にしたる家柄なり。

有賀長基墓

國學

所在 正法寺有賀長收墓の背にありて東面す。臺石に有賀とあり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺三寸六分。幅九寸。厚六寸。臺石三層。御影石。上高四寸。中高九寸。下高四寸。

刻文

有賀長基墓

七



義憤齋長基之墓 (正面)

天保四癸巳年正月八日卒 (右側面)

略傳

名長基。號長憤齋。大阪人。天保四年正月八日歿。年五十七。長基は長收の嗣子にして長隣の父なり。家學を傳ふ。

曉鐘成二世墓

戲作

所在 北區西寺町一丁目妙香院に在り。本堂の裏。墓地の西北隅にありて西面す。

碑文は曉晴翁木村明啓の撰。松川半山の書。下層臺石の前面に後曉鐘成瑩とあり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺一寸。幅八寸。厚五寸。石蓋を戴く。臺石二層。

上 砂岩。高三寸六分。下御影石。高一尺四寸。

刻文

成譽曉眠貞正禪定門 (正面)

二世曉鐘成名は貞昌姓は安部活業藥種を販ぎ傍醫術を施す故に半醫齋と戲號す天稟多才にして博く學び且世事に利く風流滑稽を樂み俳諧鄙歌を善す去る嘉永四年癸丑の春に還曆を賀するの時名を譲りて曉の號を嗣しめ我なき跡の事ども託しぬるに思ひよらずも今年閏三月十一日病に罹せられ終に黃泉の途に先立ぬるぞいはかなし時に享年四十四歳嗚呼惜むべき齡にこそ

萬延元年庚申九月建之

鶴鳴舍曉晴翁誌

翠榮堂 松川半山書 (背面)

追悼

曉 晴 翁

曉の鐘も夕につきはて、

逆さま事となるぞ悲しき (左側面)

曉鐘成二世墓



略傳

名貞昌。姓安部。號半齋。蘆友。二世曉鐘成。萬延元年閏三月十一日歿。年四十四。(傳は碑文に譲る)

安藤秋里墓

詩

所在 南區天王寺夕陽丘町梅舊院に在り。本堂の西側に在りて南面す。母の碑其の側にありて東面す。碑文は秋里の撰。中澤雪城の書。

形式 秋里碑。位牌形。碑。砂岩。高二尺三寸五分。幅八寸九分。厚六寸。臺石。御影石。高八寸五分。

秋里母碑。位牌形。碑。砂岩。高二尺五寸五分。幅一尺三分。厚七寸四分。石蓋を載く。臺石二層。上砂岩。高五寸五分。下。御影石。高一尺四寸三分。

刻文

秋里安藤先生之墓 (正面)

夫人の碑は秋里碑と相對立して北面す。

秋里先生配松原氏墓 (正面)

秋里母の碑は前者の右隣にありて東面す。

安藤秉母谷氏墓 (正面)

先妣違色養之二日。卜於蛇坂梅舊院以葬焉。而表其墓曰。先妣諱某。姓谷氏。浪華人。嫁先考安藤府君。越一年。祖妣臥病。侍養扶持十三年。先妣一日不在。祖妣不安也。祖妣歿之明年。又喪先君。寡居教育諸孤三十三年。辛艱備嘗。享年七十二。以病終。實嘉永三年庚戌正月十一日也。生四男一女。秉業儒。馨嗣淺田氏。餘皆夭。罔極之恩。不報萬一。但盡心栖神之域耳。嗚呼哀哉。

孤哀子秉泣血謹撰

哀子友 澤俊卿書 (右、背、左、三面)



略傳

名秉。字維義。通稱太郎。號秋里。介軒。歿年月享年竝未詳。

秋里は篠崎小竹門下の異才にして篠崎竹陰、奥野小山、橋本香坡と竝びて篠門四天王の稱あり。詩文を善くし又書に巧なり。中之島大江橋南詰西へ入る所に住みしといふ。文章軌範纂評の著あり。

母谷氏。入嫁の翌年より姑病みて十三年、侍養扶持備さに至り其の死を送つて後一年、重ねて夫の死に會す。爾後三十三年寡居辛苦を積みて子女を養ひ嘉永三年七十二歳を以て終る。四男一女あり。秋里、家を嗣ぎ、馨、淺田氏の後たり。他は皆天す。

稻生恒軒墓

儒醫

所在 東區八丁目東寺町天龍院に在り。本堂の裏にありて東面す。京都東山神樂岡

迎稱寺にも亦恒軒の碑あり。そは恒軒延寶八年大阪に死して天龍院に葬りしが後遺族の京に移り住みしを以て元祿九年三月十日そなたに改葬せしなり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺五寸。幅六寸三分。厚四寸一分。臺石二層。御影石。上。高七寸。下。高九寸。

刻文

稻生恒軒之墓 (正面)

先考平姓。稻生氏。諱屈顯。字謙甫。號恒軒。以慶長庚戌冬十月。生于攝州大阪。長而歷仕淀城主長井公。及宮津城主。數受寵榮。後致仕以歸攝州。壽七十有一。延寶庚申正月二十六日。病終于家。遺命一倣古禮。葬于城南天龍院寺疆。

先考明潔孝友。恕己愛物。修禮從義。樂人之爲善。至病大革。亦講學不倦。知死生之說。實有如歸者矣。娶河瀬氏。男三人。伯集義。仲重虎。季正路。集義正路以陰其祿。仕宮津城主云。(右、背、左三面)



略傳

名屈顯。字謙甫。(一云名正治。字見茂。)通稱恒軒。大阪人。延寶八年正月二十六日歿。年七十一。

恒軒本姓波波伯部氏。出で、外祖母の家を繼ぐ。因て稻生氏を冒す。祖重信、父重治、俱に豊臣秀頼に事ふ。恒軒壯なるに及んで家貧し。遂に醫を古林見宜に學ぶ。見宜深く其の才を愛して之に悉く其の秘を傳ふ。業成りて江戸に至る。淀侯永井尙征に聘せられて侍醫となり、侯の丹後宮津に轉封せらる、や亦從ひて至る。その世子尙長襲封するに及んで恩寵殊に厚し。延寶三年致仕するも侯學舎を興して吏民を教ふるや恒軒をして之が任に當らしむ。恒軒儒學に於て程朱學を奉じ、講學孜孜倦まず。六年病みて大阪に歸り、八年終に起たず。人と爲り明潔孝友、禮を修め義に従ひ人の善を爲すを樂しむ。新井白石、室鳩巢等屢その人となりを賞揚せり。著書に蠡斯草あり。配河瀬氏。三男を生む。長、集義、仲、重虎、季

正路。長子後を嗣ぐ。後名を宣義と改む。有名なる本草家稻生若水即ち是れなり。

一本亭芙蓉墓

狂歌

所在 南區伶人町清水寺に在り。西坂下。貞柳の墓の右にありて西面す。

形式 位牌形。碑 砂岩。高二尺七寸三分。幅一尺。厚一尺。臺石三層。上。砂岩。

高六寸。中。御影石。高七寸。下。御影石。高一尺六寸。

刻文

一本亭芙蓉花墓 (正面)

辭世 一本亭芙蓉花 (花押)

いつまでもきのふは人の身の上と

我身のうへは思はさりけり (背面)

天明三年癸卯正月廿六日 (左側面)

一本亭芙蓉墓



略傳

號栗里。花開樓。松濤氏。通稱平野屋清兵衛。大阪人。天明三年正月二十六日歿。年六十三。

芙蓉は鯛屋貞柳の門人にして江戸に出で狂歌を以て名あり。嘗て寶珠を畫き自贊の狂歌を添ふ。曰く磨いたら磨いたけに光るなり性根玉でも何の玉でも。著書に狂歌千歳笑、狂歌難波つと、狂歌兩節東街道等あり。

飯岡澹寧墓

備

所在 東區八丁目中寺町龍淵寺に在り。本堂の裏。東南籬の内にありて南面す。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺一寸。幅八寸。厚五寸。臺石。御影石。高七寸。

刻文

義齋飯岡先生墓 (正面)

天明四年甲辰七月廿一日歿 (背面)

此の歿年月に就ての疑問は木崎好尙氏之を其の著「家庭の頼山陽」に叙したれば左に轉載せむ。

「茲に疑ふべきは義齋(德安)が歿年なり。墓石には天明四年云々と刻せりと寺僧は語れど(無縁にて荆棘生ひ茂り親しく検討するを得ず)その寛政元年己酉十一月八日を正しとするは同寺の過去帳にも現に存録せるを見ても知るべし。而して天明四年七月廿一日は義齋の母かとも思はるゝ法名温室妙惠信女の忌日なれば何か其間に誤りを生じたるなるべし。」  
澹寧の碑の側に滄浪。その配磯野氏。その子存齋の碑あり。滄浪は澹寧の弟孝鐘なり。

滄浪飯岡先生墓 (正面) 北面

寛政丙辰六月十六日卒 (右側面)



慈室磯野氏墓 (正面) 東面

文化庚午十月四日卒 (右側面)

存齋飯岡先生墓 (正面) 東面

文化甲戌七月十五日卒 (右側面)

略傳

名孝欽。字德安。德庵。號義齋。澹寧。姓篠田氏。本姓飯岡氏。大阪人。寛政元年十一月八日歿。年七十三。

澹寧は曾祖閑徳以來大阪立賣堀南裏町に住みて世醫を業とし篠田氏を稱す。祖父忠益。父忠嘉、母は南氏。澹寧十餘歳にして兩親を亡ひ自ら幼弟を撫育し艱苦備さに嘗む。二十歳、鈴木貞齋に従游し石田氏心學の蘊奥を究めその所謂大悟徹底に詣る。其社推して宿徳となし弟子の禮を執る者多し。偶、論語郷黨篇を讀みて飄然悟る所あり道の大要は程朱の學に在りとし悉く弟子を謝遠して深く自ら守り斯學を

附

澹寧の室 淺川於柳墓

研鑽して淺見綱齋の學統をつぐ。更に年所を歴て弟子復進み、遂に都下の醇儒として聲名を馳するに至る。平居極貧、而も困窮を救卹して及ばざるを恐る。初配淺川氏、頗る婦徳あり三子を生みしも皆夭す。繼配來島氏、三女有り。長は天し次を靜、三を直といふ。靜、頼春水に適きて山陽を生む。梅颯女史即ち是なり。直、尾藤二洲の配となりて二洲の死後剃髮し梅月尼と稱し又賢女の譽高し。澹寧の弟孝鐘、滄浪と號す。嗣となりて醫を業とす。澹寧の門人に山口剛齋あり。津和野藩の文學たり。

南區天王寺夕陽丘町淨春寺に在り。本堂前の墓門を入りて正南、松樹の下にありて東面す。澹寧の門人山口剛齋の撰文を刻む。

蘭室淺川氏於柳之墓 (正面)

澹寧源先生適室淺川氏之墓。墳而不碣者九年。今茲明和乙酉之春。先生門人及



故舊。相議買石立碣。因記曰。淺川氏京人。父文治勝義。故越後國侯上士。母近藤氏。性深重貞靜。學通性命之源。孝順之德。內助之行。不愧古賢女。先生家貧子瘍。淺川氏多病患嗣絕。請以婢爲妾。先生不許。於是私絕穀數日。陽爲病。先生始不知。旣而疑詰之。曰。妾侍巾櫛有年。三子皆瘍。君年已強仕。病妾沈痼。恩不逐之。且不置側室。則是無後也。妾寧死不可致君於不孝之地也。君請無止。使妾得所則多幸。先生駭且泣。遂許以婢爲妾。後婢死。淺川氏時病猶不瘳。悲哀殊甚。飲食不下咽者數日。病又大漸。屬純實以今繼室來島氏之事。遂命婢盥櫛易籍。加衣拖帶。拱手向祠。訣先生及故舊。純實輩。數誦曰。只是一角天理。毫釐不可差。澹然而遊。辭氣之穩。顏色之整。無異於平日。其他婦道之可則者。多詳行狀中。今不能盡記。沒時寶曆七年丁丑夏四月九日。行年三十有六。葬於天王寺村淨春禪寺。

源先生門人大阪山口純實撰并書 (右、背、左、三面)

### 今北孟道墓

啓

所在 東區谷町八丁目大仙寺に在り。墓所西端の列の中央にありて東面す。枇杷の樹の側、碑文は平賀中南の撰、岳良の隸書。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺七寸。幅一尺一寸。厚八寸。臺石二層。御影石。上。高七寸。下。高六寸五分。

刻文

今北孟道墓 (正面)

維寬政二年二月二十七日孟道亡。其弟景慶來誥曰。吾兄從先生游者有年。今不幸而死。區々行實欲銘之。非先生不得伸志于地下。請銘之。余雖不能文。然平生之舊。交游之恩。哀其死也。見聞已熟。曷其辭焉。孟道姓今北。名知沂。稱逸當。孟道其字也。父稱專右衛門。母正木氏。其先世多田氏。後徙爲浪華人。自孟道幼



稚時。父有癘疾而不堪事。乃養姪良利附貲產。而使續業。躬遁于多田。以養疾。弟景慶前是往嗣母家。孟道時歲十六。獨從焉侍父之疾。自飲食起臥。夙夜莫不悉心。然醫藥無效驗而死。先四年母亦歿。孟道養父母于山中。十有餘年。辛楚備嘗。一鄉稱孝。既葬父母。又還浪華。兄事良利。良利亦友愛之。將欲讓家產而遜。孟道知之。避適京師。其在多田也。嘗奉父到京師。就吉益氏而求治。已還爲父讀醫書。從是必自行。親告父狀而取藥。百里之道往來數次。雖爲父。因是頗曉醫事。於是乎吉益氏既死。乃就其徒中西氏而學醫。旁交通於儒家及知名之士。游道廣矣。留五年。學既成。又還浪華。以醫爲業。殆將大行。居無幾。戊申冬。嬰不可拯之疾。幸而有間。則復勉強從事。景慶大懼之。懇求優游養疾。不得已而廢業。嘗語人曰。吾不得志。即死乎道路。亦無恨矣。而吾弟唯我疾之憂。至不安寢食。願吾必不起。若不從其請而死。其怨我乎。故不敢拒。乃與友輩討論詩書。又集古今書畫。展玩自樂。然疾乍發乍已。庚戌春大發。自知不起。乃曰。人無見于世。則生何爲。況

爲癘人。不如死遠矣。疾病預屬人曰。吾得正而斃。須識之。及屬續。願指示之。傍人乃扶起。端坐而終。享年四十有四。孟道爲人慷慨。急士之窮。趨人之志。必期于濟。伉直雖高貴而不屈。性穎敏辨給。好學不倦。雅遊與人能和。特厚於親戚云。嘗置妾。以盡婦道。舉以爲妻。無子。銘曰。

欲伸也維志。欲延也維壽。誰不欲有子。是人而三欲皆休。嗚呼命也矣。豈無德之有奄藏于歸。永固安茲丘。勒銘是識。以垂不朽。

平賀晉民撰

友人岳良書（右、背、左、三面）

略傳

名知近。字孟道。通稱逸當。大阪人。寛政二年二月二十七日歿。年四十四。孟道その祖は世々攝津多田の人なり。後大阪に徙る。父專右衛門、母正木氏、弟を景慶といふ。出で、母家を嗣ぐ。父癘疾有りて事に堪へず姪良利を養うて貲産



を附し業を繼がしめ自ら多田に通れて病を養ふ。孟道時に十六。父に従うて其の病に侍し飲食起臥より凡て心を盡さる無し。時には父を奉じて京師吉益氏に到り治を請ひ又自ら醫書を研め父の爲に藥物を京師に取る事屢なりしも遂に其の効なく父死するに及んで又大阪に還る。其の間十餘年、良利克く家を治む。孟道を迎へて家業を譲らむと欲す。孟道之を知つて出で、京師に去り吉益氏の弟子中西氏に就て醫を學ぶ。旁ら儒家其の他知名の士と交り留る事五年、業成つて復大阪に歸り醫を以て業と爲す。幾くもなくして大疾を得。而も間有れば則ち勉強事に従ふ。弟景慶の諫を聞くに及んで即ち事を廢し。友輩と詩書を論じ書畫を展觀して自ら樂しむ。屬纊の時預め家人に囑して正を得て死すとし乃ち端坐して瞑す。子無し。

入江育齋墓

國學

所在 東區上本町四丁目實相寺に在り。鐘樓の正南にありて南面す。碑は男、友直の建つる所にして中井蕉園の文を刻む。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺一寸。幅一尺一寸。厚七寸五分。臺石二層。上。砂岩。高八寸二分。下。御影石。高一尺三分。

刻文

育齋入江翁墓 (篆額)

大阪住友友直既葬。其父使人來乞銘於府庠助教中井曾弘。曰。吾先平姓。實葛原之裔。至備中守忠重。始氏住友。至土佐守信定。有故更氏入江。而其子孫咸復住友云。土佐隸中川清秀。死賤岳之役者也。土佐後三代曰政行。始降齒市井民于京師。四世□□五世而吾高祖王父也。諱友以。實壽濟之子。政友無子。取□□□壽濟蘇我氏。政友之姉夫矣。曾祖王父諱友信。祖王父諱友榮。□娶上林氏。後娶中西氏。凡三男。伯曰友昌。稱吉左衛門。承□□□諱周富。其季實吾父。中西



氏之出也。初壽濟穎敏多巧思。差口口銅于諸州。自坑採至爐鎔。術頗精。贏頗多。家用頗富。後見明人白水于泉州。研究其術。肇獲銀於銅中。蓋本邦冶銅之法。悉備於吾壽濟氏矣。高祖王父以其產業。入遷大阪。家于長渠。善述其事。術益精。贏益多。家用益富。及伯氏弱植多病。家僮數十人。驕奢成風。苦使役徒乾歿不貲。伯氏憂之。與族人謀曰。我之不能躬親也。匪有攝者。業殆不振矣。衆推吾父。吾父方壯。淘汰家僮。姦而侈。悉逐之。良而儉。悉舉之。革敝風。大修鑄事。礦夫爐徒咸用大蘇。而一歲所贏。不啻昔之日。世人或謂住友氏有子也。居數年。家政大整。乃分產出居豐街。於是乎始有吾小住友氏矣。吾父重義好施。救人之患難如嗜慾。一日有友人來。問之曰。聞子疾既愈。而面尚墨何居。友人曰。身疾則愈。家疾未也。何謂家疾。曰鄉屢貸于子。積千餘金。而我產滋頽。恐終身不能償也。其爲疾也大矣。病憊之餘。憂念及此。能無墨哉。吾父憮然曰。以子之辱與我遊也。聞其有患。輒厪救焉耳。我不忍以所以救一朝之患者。成其終身之憂也。急取券于

筐。悉焚之曰。子償清矣。自此家亦無疾。其果斷弗恡。類如此。吾父自少好學。受業于蘭州五井先生。亦好和歌。仰教于冷泉藤公之門。旁喜神道之說。師事爲垂加之言者原清茂。篤信強記。尙恐有失。所受必筆焉。終身手錄。凡三百卷。其精亦如此。今年七月二十日。以天年終。壽八十二。葬于城南實相寺塋次。吾母京師鈴木氏也。先卒無子。庶出男女子各三人。友直則吾。其長子也。季友諒。出後於中澤氏。女子嫁京師荒木氏。一男與兩女既沒。曾弘曰。善翁行不易得者矣。余聞之。翁晚節好施大過。家貲告匱。而翁則老焉。友直當室。一謝外問浮交。銳意勤儉。自奉與僕隸亡異。而器服飲食。凡所以事翁。豐隆循舊。積十餘年。殷實復初。蓋其間勉強勞苦。不使翁知焉。生也優事之。死也厚葬之。又乞銘以圖永存。是真能子亦不易得者矣。可銘也。遂以銘。翁諱友俊。號育齋。自其曾祖王父而下。多以理兵衛稱。翁亦然。其獨姓入江。存土州之舊也。今年寬政十一年。



## 略傳

名友俊。通稱理兵衛。號育齋。大阪人。寛政十一年七月二十日歿。年八十二。育齋の先は任友備中守忠重に出で土佐守信定に至りて故有り姓を入江と更む。然るに其の子孫皆住友に復して之を姓とす。育齋獨り入江氏を稱す。數世の祖に壽濟と曰ふあり。性穎敏巧思多し。銅を諸國に採りて之が採掘と鎔爐とに研究を重ね、明人白水と和泉に會ひてよりその研究益務め銀を銅中に獲たり。實に本邦冶銅の法悉く壽濟に備はる。其の子友以、京より大阪に移るや長堀に家し、鑄銅の術益進むに隨ひて資財日に富み、住友の名漸く浪華長者の中に重し。實に現在住友氏宗家の祖なり。吉左衛門友昌の時主の多病なるに加へて家僮數十人驕奢風を成し、窃に家金を乾没するもの多し。此に於てか友昌其の弟育齋を擧げて之が救濟の道を講せしむ。育齋時に年正に壯、銳意弊風を革め大に鑄銅の事を修む。則ち礦夫爐徒大に奮勵し事業愈盛に私財俄に増すに至れり。居る事數年にして友昌之を徳と

し育齋に命じて別家を立てしむ。乃ち出で、豊後町に家す。現時上本町八丁目なる住友氏はれ也。育齋人と爲り義を重んじ施を好み人の患難を救ふこと嗜慾の如し。又幼より學を好み儒を五井蘭洲に學び和歌を冷泉卿に習ひ傍ら神道の説を垂加流の原清茂に聽く。篤信強記、尙失ふ有らむを恐れて受くる所は必ず筆記し終身の手録凡三百卷に上るといふ。配三木氏、先づ卒して子無し。庶出男女子各三人。長を友直といふ。後を嗣ぐ。季を友諒といふ。中澤氏の嗣たり。女は京都荒木氏に適く。

## 入江昌喜墓

國學

所在 東區八丁目中寺町梅松院に在り。本堂裏。墓門を入りてすぐ左手、西面す。形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺六寸三分。幅一尺二寸。厚七寸八分。臺石二層。御影石。上。高一尺。下。高一尺二寸。



刻文

長輔入江翁之墓 (正面)

翁俗稱梗並屋半次郎。姓入江氏。諱昌喜。號長輔。或俊梶子。行狀詳碑文。寛政十二年庚申八月十二日卒。年七十九。

享和二年秋八月

不肖子入江五郎兵衛壽喜謹建之 (背面)

墓誌銘を刻める石は別に立ちて同じく西面せり。文は頼春水の撰、篠崎三島の書に成る。

入江翁墓誌銘

浪華之人多好文墨。士君子可恥也。而又鮮有能成其業。而名其家者。乃有若入江翁者焉。其可嘉哉。翁名昌喜。稱半次郎。考曰道喜。世住浪華。翁三歲而孤。母氏性嚴教養有方。兄曰節休。翁爲人温雅而剛決。夙喜讀國籍。既長一日慨然曰。丈夫處世也。當成名於文武事。何必岌々守市井之業。謀諸節休。節休未許。過弱

冠。節休病歿。一子亦夭。乃喟然曰。使我弗免于市井。亦天也。日夕拮据二十餘年。先是有義子昌久。乃授其產。卜地高津而老焉。扁曰幽遠窟。自謂吾其始免乎。讀書之業可續也。但年過半百。殘生無幾。雜然孜孜。夜以繼晷。十年猶二十年。尙可以成其志也。於是乎研精十許年。義子又病沒。乃不得不復還其故宅。修其舊業。時更養壽喜亮喜二子爲子。授業七年。而獲歸其幽遠窟。曰。吾年一週甲。顧其既往寸進尺退。復何追咎。亦復奮勵勉學。時已以其於國籍精確無比。聞于都下。寛政乙卯之春。妙法親王令旨。補著萬葉類葉抄十六卷。稱旨。特嘉獎之。賜序。事詳其文。余曩在浪華。一再見翁。言貌非常。蓋偉丈夫也。時江田世恭以博洽聞。其耿介罕所稱許。獨誦翁曰。入江昌喜志于吾學。學已有成。勤敏亦至于斯乎。世恭先翁而死數年。恨不使之及觀晚成之著。吁翁欲進數蹶。遂成其業。不亦可嘉乎。所謂困之進人。於翁乎觀之。翁實偉丈夫也。所著竹取物語補註三卷。和田津海十二卷。青陽唱詠一卷。久保取蛇美十五卷。異名分類抄四卷。榮



花採葉二卷。葦手考一卷。仁德天皇傳一卷。本朝地名考三卷。萬葉類葉抄十六卷。翁配橋本氏。有子。母子已沒。娶萬氏。無子。翁以寬政十二年庚中秋八月十二日沒。享年七十有九。葬浪華城南梅松院。養子壽喜小山氏之子也。本同其族。余與小山氏有舊。因寄其狀。請墓銘。義不可辭。爲銘。銘曰。

嗚乎津人稱多文。業緒有成就若君。賦性之厚亦能勤。吾欲鐫詞警津人。其書數種有遺芬。尙徵之梅松之墳。

享和二年壬戌三月

藝藩教授賴惟寬謹撰

浪華處士筱應道謹書 (正 面)

略傳

名昌喜。通稱榎並屋半次郎。號長輔。後親子。白澤老人。獅子童。大阪人。寬政十二年八月十二日歿。年七十九。

昌喜は商家の出なり。三歳の時父を喪ふ。稍長じて國籍を讀み文武を以て名を

揚げん事を欲せしが、兄節休死し其の子亦早世するに及び昌喜終に其の所志の事叶はぬを悟り飄然として日夕家業に拮据する事凡二十餘年。後産を擧げて義子昌久に授け、自らは地を高津に卜して退隱す。其の居を幽遠窟といふ。深く讀書に耽りて研精十年許、昌久亦病歿す。乃ち復その故宅に還つて舊業を修めしが、更に二義子壽喜、亮喜を養ひ之に業を授くること七年にしてその舊棲幽遠窟に歸るを得たり。此に於てか愈勵精學に勉め名聲都下に廣まるに至る。寬政七年の春には妙法院の宮の令旨を奉じて萬葉類葉抄を著し旨に稱ひ特に嘉賞せられて席を賜ふ。昌喜人と爲り温雅にして剛決、江田世恭、之を稱して勤勉及ぶべからずとせり。昌喜の幽遠窟に在るや。時に契沖を訪ひて疑義を質問せりといふ。著書に仁德天皇傳、竹取物語補註、萬葉類葉抄、同補闕、榮花採葉、異名分類抄、葦手書考存疑、和田津海、青陽唱和、久保之取蛇尾、本朝地名考、幽遠隨筆、眞珠の船、萬葉集說等あり。



入江石亭墓

鑒賞

所在 梅松院に在り。入江昌喜墓の右隣にありて西面す。次女永耻嗣子親喜の建つる所にして篠崎小竹の碑文あり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺九寸。幅一尺九分。厚七寸。臺石二層。御影石。上。高六寸八分。下。高六寸五分。

刻文

石亭入江翁之墓 (正面)

翁諱壽喜。字季鶴。號石亭。本姓小山氏。兄伯鳳。仲鵬。皆有才名。翁幼爲姻族入江長輔翁所養。嗣其家。天保十年己亥朞月十二日病歿。年七十四。葬梅松院先塋之次。法號長敬。娶藤井氏。先沒。生二女。長曰禪天。次曰德。繼室者再。齋藤氏。羽間氏。亦皆先沒。齋藤氏生一男。殤。以義姪重喜之弟親喜爲嗣。德祝髮

在家。稱永耻。遣人來請曰。祖父伯叔父之沒也。當時者宿。皆爲銘其墓。識先人者今有先生。願誌數語。使後人不忘焉。翁善書及和歌。而最好古書畫。苟遇珍蹟。多方購之。不論其直。以故收藏甚富。而賞鑒亦精。初兼和漢。後舍漢曰。眼力不及也。乃專聚和蹟。極其品評。凡自室町氏以來數百年間。公卿武弁儒流高僧隱逸諸名人所筆。經翁一顧。價自數倍。又能考群書知名人事蹟。是以四方翕然仰翁鑒定。予更服其博洽也。性恭重不汎交遊。雖予之自幼相識。不過歲中一再往來。而聞平生嘉予能不忝先業。永耻之請有以也。其可辭哉。銘曰。

古畫名蹟尙友滿室。閉戶披對能自怡悅。伯仲好文天不長生。翁獨異撰得年得名。

天保十二年庚子十二月

篠崎 弼撰并書

次女永耻嗣子親喜謹立 (左、背、右、三面)

略傳

名壽喜。字季鶴。號石亭。本姓小山氏。養入江氏。法號長敬。大阪人。天保十年



十二月十二日歿。年七十四。

石亭は小山伯鳳の弟にして幼時姻戚なる入江昌喜の養嗣子となる。書を能くし又和歌に巧に、殊に古書畫を好み珍蹟にあへば多方之を購ひ値を論せずして收む。故に收藏甚富み賞鑑亦精し。初め和漢の筆蹟を鑒定せしも後は一に國朝の筆蹟に止めて品評せしが、室町以後數百年間公卿武弁儒者高僧隱逸諸名人の筆する所、一度その鑒定を得ば價值數倍の高きに上る。又能く羣書を考へ名人の事蹟を知り、四方翕然としてその鑒定に服すと云ふ。配藤井氏、先づ卒す。二女を生む。長を禪といひ天死し、次女を徳といふ。徳祝髮家にありて永耻と稱す。繼室するもの再び、齋藤氏、羽間氏皆先づ歿す。齋藤氏一男を生みしが殤す。乃ち義姪重喜の弟親喜を以て嗣とす。

一睡亭海棠墓

狂歌

所在 南區天王寺伶人町清水寺に在り。西坂下、一本亭芙蓉の墓の右隣にありて西面す。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺二寸八分。幅一尺二寸三分。厚七寸九分。臺石三層。上。砂岩。高五寸五分。中。御影石。高九寸八分。下。御影石。高一尺。

刻文

一睡亭海棠華墓 (正面)

辭世

いまこそは常なき風の手枕に

見し一睡のゆめぞさめ行 (背面)

享和元辛酉年仲稔日 (右側面)

略傳

享和元年八月二十七日歿。享年未詳。狂歌を善くす。



齋部道足墓

歌

所在 南區天王寺夕陽丘町梅舊院に在り。本堂のすぐ西横にありて南面す。友人關深の碑文あり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高一尺八寸七分。幅八寸。厚七寸。臺石二層。御影石。上。高四寸。下。高一尺一寸。

刻文

齋部宿禰道足墓 (正面)

齋部道足翁止云流陸奥會津人奈流弱時山許禮乃難波爾來且年麻稱久住利計常爾阿我利  
多代乃手振乎志奴比且所作歌母古風乎慕比殊爾長歌乎好且其數八百餘作利如是長歌乎  
多久作流人波古與伊麻太聞受世爾例無支歌作爾有計流惜加悲加齡六十止云爾一不足且今  
年文化乃十三年止云年乃八月爾奈暴病乎爲且身死利奴然波雖在其烟止奈世跡乃骨乎此近

支當爾名爾高支住吉乃峯乃邊爾埋且家乎造置且翁乎所知流人波見每爾偲出翁乎不知流人母  
語繼言繼且翁我名波遠長久萬代爾不絶將有事乎人皆乃言流爾然家乎造利表石爾將鐫且此  
波其子千春我吾爾詔且令作多其辭吾波翁我好支友流關深奈 (右、背、左、三面)

略傳

岩代會津人。文化十三年八月歿。年五十九。

道足は早くより郷を出で、大阪に住み志を古學に潜めしが、其の歌亦古風を慕ひて殊に長歌に巧みなり。其の作れる長歌の數八百に上れり。生涯を通じてかく多く作れるは古來稀なりといふ。子に千春あり後を嗣ぐ。

稻垣休叟墓

茶道

所在 東區小橋寺町大應寺に在り。門を入りて西北隅、無緣塔の西にありて南面す。形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺六寸二分。幅一尺二寸。厚六寸四分。臺石。自然

稻葉休叟墓



石（御影石）高一尺八寸五分。

刻文

稻垣休叟居士之墓（正面）

文政二年七月二十三日没于家享年五十歲（背面）

略傳

號休叟。竹浪庵。默々齋。松竹主人。文政二年七月二十三日歿。年五十。休叟は千五世宗左（畔翁後改宗且）の門人にして茶道を能くす。

一本亭魚鱗墓

狂歌

所在 南區天王寺俗人町清水寺に在り。西坂下、一睡亭海棠墓の右隣にありて西面す。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺三寸。幅一尺一寸九分。厚八寸二分。臺石三層。

第二圖



木村兼葭堂



上。砂岩。高五寸。中。御影石。高一尺七分。下。御影石。高一尺一寸七分。

刻文

一本亭魚鱗翁墓 (正面)

何ひとつ我ものもなきかりの世に

かた身と残しおくは言の葉 (左側面)

文政七年甲申十二月廿五日 (右側面)

略傳

文政七年十二月二十五日歿。享年未詳。狂歌を善くす。

石津亮澄墓

國學

所在 東區餌差町圓珠菴に在り。奥庭契沖墓所南の墻内東南隅にありて南面す。  
形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺四寸。幅九寸六分。厚六寸四分。臺石。御影石。

石津亮澄墓



高一尺一寸二分。

刻文

富草屋石津君墓 (正面)

君姓石津。名亮澄。字并輔。富草屋其號。又號米居。君性嗜和歌。初從蘿月尾崎氏游焉。後事藤垣内本居翁。學既成矣。就之者多云。安永八年己亥十月十三日癸亥。生於攝曾根崎。天保十一年庚子二月九日。沒於浪華。年六十二。(右側面)

略傳

名亮澄。字并輔。號富草屋。米居。大阪人。天保十一年二月九日歿。年六十二。亮澄は大阪曾根崎の人にして性和歌を嗜み初め尾崎雅嘉に學び後本居大平の門に入りて古學を修む。業成りて後唐物町中橋に住み徒を延いて教授す。從學者甚多し。著書に徒然草新釋、夫木和歌抄古調、袖中夫木抄考、屏風畫題和歌集、拾遺六帖、新吳竹集等あり。

池内陶所墓

儒

所在 東區上本町四丁目大福寺にあり。本堂の南、念佛寺墓所との境、中央籬の側にありて東面す。

形式 位牌形。碑。御影石。高二尺四寸四分。幅一尺三分。厚一尺五分。臺石二層。御影石。上高一尺五寸七分。下高五寸五分。

刻文

池内陶所先生墓 (正面)

右は新碑にして舊碑は其の背後にあり。位牌形。碑。砂石。高一尺六寸一分。幅六寸六分。厚四寸四分。臺石二層。御影石。上高七寸五分。一、高四寸二分なり。刻文。表に題して「陶所先生墓」として西面し、右側面に「松田正助建之」と刻む。

尙陶所新碑の向つて左側に其の生母岡田延子の碑あり。同じく東面す。貫名海屋の



撰文あり。

形式 位牌形。碑砂岩。高二尺五寸二分。幅一尺四寸。厚七寸三分。臺石二層。御影石。上高一尺六寸。下高五寸。

刻文

貞淑婦人岡田氏墓 (正面)

孝子池内奉時建

貞淑婦人墓記

貫名苞撰

婦人諱延子。京師岡田三郎兵衛之女。年十六歸池内貴治。生四女三男。年三十九而寡。長女適松林寺佛蓮。二女夭。三女適大津溝口善兵衛。先歿。男奉時虎二有禎。虎二夭。有禎亦歿。四女適北脇淡水。婦人性幽閑貞靜。逮事大小姑。克盡婦道。得其歡心。既寡。專治家事。家有宿逋七百金。乃賣居宅及什器。悉償之。而撫育願復。處艱苦自如。散與服飭嫁三女。買書供紙墨。令二子孜孜勤學不倦。平素不好戲笑。

褻慢之言。不出之口。蓬頭垢面。綿衣荆釵。凜凜霜雪三十年一日。奉時安政戊午秋。逢大厄。己未十二月遽遷大阪。侍養益勤。萬延庚申閏三月廿三日疾歿。年七十五。葬于上本町大福寺。諡曰貞淑婦人。奉時與余友始四十年。以爲悉婦人莫余如也。屬墓記。

女憲所謂永畢者。於婦人見之矣。斯爲銘。(右、背、左三面)

畧傳

名奉時。號陶所。稱大學。文久三年正月刑死。享年未詳

陶所は京部の儒醫なり。父を貴治といひ母は岡田氏。陶所、梁川星巖、頼三木三郎、藤井竹外等と親交あり勤王の志厚し。安政六年八月二十七日幕府の忌む所となりて遠島を仰付かる。後文久三年正月に至り大阪難波橋畔に於て梟首せられて死す。未だその傳を詳にせず。その舊碑を建てたる松田正助は大阪の書賈なり。或はその門に學びたるの人ならむか。陶所の母岡田氏の貞淑は貫名海屋の碑文に於て明かなり。



梅川忠兵衛墓

所在 東區東高津北之町傳光寺に在り。本堂の前庭、北側にありて南面す。

形式 二碑より成る。竝に、同形同大なり。位牌形。碑。砂岩。高一尺八寸。幅七寸一分。

厚五寸二分。臺石二層。御影石。上高八寸四分。下高七寸六分。

刻文

(梅川の碑)

梅室妙覺信女 (正面)

俗名槌屋抱梅川 (右側面)

(忠兵衛の碑)

妙法頓覺利達 (正面)

俗名龜屋忠兵衛

(右側面)

實永七庚寅十二月五日 (左側面)

略傳

忠兵衛は屋號を龜屋といひ飛脚屋を業とす。新町槌屋の遊女梅川の色に溺れて金錢に困じ遂に西國の大名より江戸に送る封金二百五十兩を竊取し遊蕩費に供して償ふ能はず。此の事官の知る所となり捕はれて入牢す。實永七年十二月五日牢死、傳光寺死體を引取りて同墓地に埋む。翌年三年近松巢林子之を脚色して淨瑠璃冥途の飛脚を作り操芝居に上場してより其の名喧傳するに至る。傳光寺に在る梅川の墓は忠兵衛の墓の存するによりて後に建てたるものにして大正五年五月近江矢走の清淨寺に梅川の墓發見せらるゝといふもの眞なるに近し。尙忠兵衛の墓はもと傳光寺本堂の背後にありしといふ。

大岡春卜墓

畫



所在 南區下寺町二丁目光明寺に在り。本堂背後丘上無縁塔の西側にありて東面す。嗣子春川の建つる所にして岡白駒撰、河野恕齋の書に成る碑文を刻む。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺三寸。幅九寸三分。臺石二層。御影石。上高六寸七分。下高九寸。

刻文

大岡法眼一翁春卜之墓 (正面)

翁姓大岡。諱愛董。字春卜。雀屹其號也。攝大坂人也。少好丹青之技。傳狩野氏之法。廣搜旁索。能抉厥秘。而無常師也。出以己意。工贍絕倫。輕墨淺彩。濃墨淡描。自禽蟲花木人物鳥獸。種々之致。徃々極其從容。正德中見知於嵯峨法主。待遇甚渥。翁名日益起。施於四方。尺幅寸楮。人爭傳之。京攝之間。屏障屋壁。不得翁畫。不以爲華。迺佛刹梵殿。若侯家堂庭。亦爲翁所畫焉。四方之請。常相錯於門。翁年已太高。益見矍鑠。精爽不衰。自適于筆墨間。亶々不倦。畫神護寺殿壁。時年蓋過

八旬云。今茲寶曆癸未。距其生貞享庚申。八十有四。疾病自覺不起也。遺命謂余銘墓。迺足死矣。遂以六月十九日卒。配糸川氏。翁有義子。曰如清。拊愛如己出。已長之。東都。以善畫。繼於狩野如川氏。次曰甫政。嗣孫男二女一。翁於它技藝。少所不能。自國風以下。及音律雜曲茶理射香。翁皆綜理之。然不甚留意。所嗜唯丹青。所玩唯筆墨。不役々於世營也。爲人寬厚。與人必全其交。尤厚於親族。故舊困乏多所周。此亦足以概其平生矣。時人則唯稱翁之畫。不容云。銘曰。人莫不願壽。翁之壽八旬是羸。人莫不欲名。翁之名兩都是傾。名壽兩全。孰如其榮。嗟翁兮。嗟翁兮。汝兆汝域。往安而靈。

岡 白駒撰

男 子龍書

孝子甫政敬建 (右、背、左、三面)

眞源院清幸之墓 (正面) 春卜碑の左隣  
敬光院梅室 (東面)

大岡春卜墓



眞源院糸川氏。大岡春卜之配也。生元祿戊寅。終于安永丁酉三月十四日。享年八十一。敬光院河井氏。大岡春川之配也。生元文丙辰。終于安永丙申十月廿一日。享年四十一。偕葬光明寺内。(背面)

安永七年夏五月

大岡 嘯 川建 (左側面)

路傳

名愛董。字春卜。號雀屹。大阪人。寶曆十三年六月十九日歿。年八十四。

春卜少くして丹青の技を好み専ら狩野派を修めて能く其の秘を抉る。而も終に常師無きなり。己が意を以て新に機軸を出し其の工、倫を絶す。正徳中嵯峨法主の知遇を蒙りてより名聲日に益々起り尺幅寸楮人争ひて之を傳ふ。京攝の間屏障屋壁春卜の畫を得ざれば以て華と爲さず。佛寺、侯家、宮廷春卜の畫く所を掲げざる少し。年老いて愈々鑠神護寺殿壁の畫は八十歳後の作と云ふ。法眼に叙せらる。嘗て明人の畫を刻して色彩を施し公刊す。名づけて明朝紫視と曰ふ。世人を益する頗る大なり。

り。其他著はす所に畫本手鑑、畫史會要、和漢名畫苑、甲州二十四將圖、名花十二種等あり。配糸川氏、子無し。義子二あり、長を如清と曰ふ。長じて江戸に出で畫を善くするを以て狩野如川氏の後となる。次を甫政といひ箕裘を嗣ぐ春川是れなり。春卜人と爲り寛厚、友に對して必ず其の交を全うす。尤も親戚故舊に厚く困乏には周む所多しといふ。

大岡春川墓

畫

所在 光明寺大岡春卜墓の北にありて東面す。碑文は河野恕齋撰并書する所。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺三寸。幅九寸四分。厚七寸三分。臺石二層。御影石。上高七寸。下高六寸五分。

刻文

大岡法眼春川墓 (正面)

大岡春川墓



法眼大岡春川墓志銘

河子龍撰并書

君姓大岡。諱甫政。字春川。號芙蓉齋。祖貫播州小川人氏。本姓曰有元。播之名族也。君少游於浪華。學畫法於春卜翁。行筆清贍。優入能品。翁素亡子。以君出藍之才。雅道有託。遂養君爲子。六法要訣。成究其妙致。兩世名家。賞譽騰踔於一時。

近衛相公及嵯峨法主。聞其名特褒賞之。屢被延招。明和甲申叙法眼。亡何

太上皇宮成。其殿壁屏障。皆簡一時名流。以畫之。君亦在厥選。畫成賞賜各有差。時人榮之。君爲人寬和。喜慍不形于色。交際接遇。與物無忤。承上接下。並得歡心。以是人人皆謂長者而重之。君配河井氏。生三男一女。長名政董。字嘯川。年甫弱冠。亦傳家法。揮寫有父風。次皆幼。君生於享保四年秋九月。以安永二年秋九月而終。享年僅五十有五。葬浪華東郊光明寺中。銘曰。

丹青之妙。觸發天機。象似盼際。寧洞厥微。脫俗超凡。自然天成。筆墨有神。視茲襟靈。

昔

安永三年秋八月

孝子政董建 (右背、左三面)

略傳

名甫政。字春川。號芙蓉齋。原姓有元氏。嗣大岡氏。播磨人。安永二年九月歿。年五十五。

春川は播磨の人なり。少うして大阪に出で畫を大岡春卜に學ぶ。春卜子無し。春川が出藍の才有るを以て託すべしとなし養つて子と爲す。春川六法要訣悉く其の妙致を究め畫名一時に高し。近衛公及び嵯峨法主特に知遇を賜ひ屢延招せらる。明和元年法眼に叙せられ後仙洞御所の成るや其の殿壁屏障を畫くに當時の名流を簡びて之に當らしめられしが春川亦その選にあり。時人之を榮とす。河井氏、三男一女を生む。長、名は政董字は嘯川能く家法を傳ふ。春川資性寛厚。長者の風ありといふ。



大矢尙齋墓

啓

所在 南區天王寺夕陽丘町淨春寺に在り。本堂の裏、麻田剛立墓の西南にありて西面す。片山北海の撰、牟岐述齋の書になる碑文あり。男允の建つる所。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺二分。幅一尺一寸九分。厚七寸六分。臺石二層。御影石。上高七寸。下高九寸五分。

刻文

尙齋大矢先生墓碣 (篆額)

醫者意也。言不可盡。書不可得。而惟其人。榮庵氏於良山氏其庶乎。蓋其徒日侍函丈。不下百人。及其沒。長子椿庵又卒矣。其徒欲以所事。師事榮庵。無或之強云。先是尙齋君自越來。遊椿庵門。年甫十三。椿庵卒。亦師事榮庵。榮庵愛君穎悟秀發。不翅視猶子也。後移居浪華。君實從焉。或爲榮庵無嗣。從與以蓄妻妾。乃辭曰。吾幸

墳墓有守。緒業有尙齋。吾又奚憾。其意謂於君猶己於良山也。君精技可以槩知己。宜矣門多病焉。君諱弼。字丈介。姓大矢氏。尙齋其號。越前粟田部人。曾祖團右衛門。仕總結城德川家。及結城移封越前福井。曾祖從焉。後遭福井秩貶國割。及辭仕。退居粟田。改號素庵。業醫。自是世承醫與號。以至君。君僑寓浪華。家計尙微矣。娶岡光房女。即余所識賓王妹也。初岡翁欲贅君。以謀榮庵。榮庵使君脫身就之。而君不欲。則遂館于貳室。而適之也。君技加進。名加知。乞治者。履每滿戶。是以苞苴精賄。至無暇日。乃以橐贏買地城東。爲憩息之處。百卉園是也。君爲人溫恭清勤。喜施予。平生無他嗜。獨夙夜醫事而已。惜乎安永癸巳三月十六日病卒。享年纔四十八歲。葬城南淨春寺內。生二男長子名允。年甫九歲。次子孩死。允從母憂居百卉園云。銘曰。

技進乎道其人邪。命之脩短則天也。人乎勤天乎全。技售德宣。清珉之勒以貽永年。

越後片猷撰



浪華 牟 純 書  
 孤子 允 建  
 彫工 半田 豊 高(正、右、背三面)

略傳

名弼、字丈介。號尙齋。越前粟田人。安永二年三月十六日歿。年四十八。  
 尙齋の曾祖父團右衛門、下總結城の徳川氏に仕へしが主の轉封と共に越前福井に移り後致仕して粟田に居り素庵と號して醫を業とす。爾後代々醫を繼ぐ。尙齋十三歳にして京に上り後藤良山の長子椿庵の門に遊ぶ。椿庵卒して更に良山の高弟足立榮庵に師事す。榮庵甚尙齋の英才を愛し之を遇する猶子の如し。榮庵後大阪に移るや尙齋又從ふ。榮庵子無し然も一尙齋あるを以て後事以て託すべしとなす。尙齋技の進むと共に名愈加り治を請ふ者門に滿つ。人となり温恭清勤、施與を喜み他の嗜好なく唯醫事につとむるのみ、岡光房の女を娶りて二子を生む。長を允といひ後を嗣

ぎ次は天す。

大島梅嶼墓

詩

所在 南區天王寺生國寺町玄徳寺に在り。寺域の南方中央にありて北面す。中井竹山撰の碑文あり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺一寸四分。幅一尺一寸。厚七寸。臺石三層。上砂岩。高五寸。中御影石。高六寸八分。下御影石高。八寸。

刻文

默翁大島君之墓 (正面)

君諱 利。字貞卿。號梅嶼。稱治部左衛門。原姓八田氏。大阪府人。世爲大府東衙吏曹。考曰定良。君實爲次子。妣大島氏。府下赤石邸處守官兵衛長重女。長重嗣曰一誠。不樂于仕。又無子。乃取君爲後。而老。因冒其姓氏。大島蓋在中將平維盛遠



奇。譜牒可徵云。君廉公謹慎。奉職稱能。五遷終於府邸處守。從少好兵法。善騎巧射。又受學日本藩儒。由蛻巖梁田氏。梁田氏詩名冠絕。其集中十二偃詩有曰。梅嶼春傳浪華香。蓋獎君也。有詩稿一卷。藏于家。旁好俳詞。愛茶禮。晚節悅禪理。與諸名衲交。自號默翁。皆雅澹餘適。其平素居止。則歸重於儒術。其生元祿十六年癸未四月四日。其卒安永四年乙未五月十四日。壽七十有三。塋在生國之丘玄德寺。娶本藩富井種玄女。有賢行。頗通書史。能國詩。人稱閨範。君亦資其內助。先卒。所生三男四女。長名九齡。襲官祿。蓋藩以君克勤勞。嗣又有文行。特命世官也。人榮之。次歸浮圖氏。名紹拙。季名定靜。長女適八田之定。次女適中村常諄。其餘在家。家人相議。以余爲可圖不朽者。爲狀一篇。以來謁焉。余也與其孤善。而速知君。故辭不至固。用紀于石。其銘曰。

惟嘿道之所寓。奚必空而必玄。身也立于赤石。聲則存乎蒼岷。

大阪 中井積善撰并書(右、背、左三面)

略傳

名一利。字貞卿。號梅嶼。默翁。通稱治左衛門。原姓八田氏。養嗣大島氏。大阪人安永四年五月十四日歿。年七十三。

梅嶼は家世々大阪東町奉行所の吏員にして父を八田定良といふ。梅嶼その次子に生れ母氏の姓を冒し明石藩の大阪邸留守居たり。幼より兵法を好み騎射を善くし又詩文を明石藩儒梁田蛻巖に受く。蛻巖の詩に「梅嶼傳春浪華香」といひて推獎せるあり。旁ら俳諧を好み煎茶を能くし晩年には禪に參じ默翁と號して優游の日を送れり。岩井種玄の女を娶る。夫人又賢行あり。書史に通じ和歌を善くす。三男四女あり長子九齡後を繼ぐ。赤水と號して温沌詩社の詩人なり。次を紹拙といふ僧たり。三男定靜といふ。長女は八田之定に嫁し次女は中村常諄に適く。

奥田元繼墓

儒



所在 南區逢阪上ノ町一心寺に在り。本堂前南にありて南面す。湛々翁墓の西南。元繼自撰の碑文を刻す。男元純と門人高岡公襲と謀りて建つる所なり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺三寸。幅一尺四寸。厚一尺二分。臺石二層。御影石。上高一尺五分。下高一尺六寸。

刻文

拙古奥田府君之墓 (正面)

藏尸柩於此石下者。播州人也。那波宗求居士子。母三木氏。早遊於京師。與兄魯堂俱學焉。其後家於浪華。以程朱學業儒。名元繼。字志季。號拙古。別曰仙樓。假冒妻姓。曰奥田。雖專心經史。天稟卑拙。無如之何。及晚著春秋左傳評林。唯恐貽僭竊之誚也。嘗卜地荒陵西坂松山一心寺側。爲窆窆之所。生死之理。無可知之義矣。私樂儻向泉壤而有知。則旦夕於諸尊族。而給仕於左右。且以與親友義故。交臂於一堂之上。談古今爾。元繼自誌。

文化四年丁卯秋八月十二日終于家。享年七十九。

孝子 奥田元純謹建之

門人 高岡公襲謹書之 (背面)

略傳

名元繼。字志季。號拙古。尙齋。仙樓。原姓那波氏。嗣奥田氏。播磨加古川人。文化四年八月十二日歿。年七十九。

元繼祖父と那波活所といひ父を草庵といふ。兄魯堂と與に早くより京に學ぶ。業成りて大阪に下り程朱を奉じて帷を下す。専ら志を經史に潜め特に春秋を好み左傳に於て發明する所多し。著書に増訂左傳評林、左傳捷覽、左傳釋例稿、定本大學左右指南、滅魔燈、十二律考、赤城梅花記、兩好餘話、清詩選、仙樓文章、拙古堂集等あり。

大鹽平八郎墓

儒



所在 北區末廣町成正寺に在り。本堂前蘇鐵の西側にありて南面す。

形式 位牌形。碑。御影石。高二尺四寸八分。幅九寸八分。厚八寸五分。臺石。御影石。一尺六寸三分。

刻文

中齋大鹽先生墓 (正面)

明治三十年十月念門人田能村癡書 (背面)

略傳

名後素。字子起。通稱平八郎。號中齋。洗心洞主人。大阪人。天保八年三月二十七日自刃。年四十五。

平八郎祖父を政之丞成余といひ父を平八郎敬高といふ。父早く歿せしより祖父の嗣となり世職大阪東町奉行與力を襲ふ。頗る吏務に長じ或は耶蘇の邪黨を捕索し或は猾吏姦卒を糾察し或は浮屠の汚行を處斷するなど功績多く勢一時を傾く。而

るに官長東町奉行高井山城守老を以て其の職を去るや平八郎亦その己を知るものなきを慨き天保元年七月之と進退を共にし、家督を養子格之助に譲る。爾後幼より好む所の儒學を修め、更に深く陽明の學を究めて困苦辛酸修省の極を盡し、傍ら徒を延いて授く。天保八年米價俄に騰貴し市氏餓死するもの多きを見るや慨然として起ち之が賑恤を奉行に迫りしに言納れられず乃ち有司を懲さむが爲に兵を擧ぐ。密告する者ありて事成らず、遂に逃れて油掛町美吉屋五郎兵衛方に隠れしが發見せらるゝに及んで自ら燔死す。格之助亦之に殉す。著書に、古本大學刮目、古本大學旁注、儒門空虛聚語、洗心洞劄記、洗心洞詩文等あり。格之助名は尙志字は士行、東組與力西田青太の弟にし自刃の時廿七歳といふ。

附

## 大鹽一家墓



祖父成余、父敬高、養子格之助の諸碑同じく成正寺にありて成余、敬高は本堂前蘇鐵の東側に格之助は平八郎墓の左隣に在り。

大鹽成余之墓 (正面)

祖考俗名政之丞。諱云云。文政元年戊寅夏六月二日卒。享年六十有七。嫡孫平八郎建是碑焉。(右側面)

大鹽敬高之墓 (正面)

家君諱云云。俗名平八郎。寛政十一年己未夏五月十有一日卒。享年僅三十。嘗葬焉。舊碑爲火災燒燬。因再製碑云。天保六歲次乙未冬十二月。長子源後素誌之。

(右側面)

寛政十二庚申七月廿五日

了眠童子

了眠家君二男。便後素弟。俗名忠之丞。年二歳而死。(左側面)

大鹽格之助君墓 (正面)

大正五年六月 大阪陽明學會 (背面)

尙又高祖父其他の墓は西成郡豊崎町字南濱濱村墓地に在り。東南隅大樟の樹の下にありて南面す。

春岳院清空

本覺院不二日性  
耀山院誠意日涼墓 (正面)

覺信院秀雄

春 寛延二年 三月廿九日

本 安永二年 六月廿六日

翅 文政元年 六月朔日

覺 文化二年十二月十五日

嗚呼歲月久。舊碑摧壞盡矣。其文字不可少概見也。余竊患子孫不認先塋之所在。乃

(左側面)



換舊以新。次叙各厥諡號。而刻爾焉。其春岳我高祖父喜内。本覺其弟助左衛門。耀山我祖父政之丞。覺信我叔父。養于石川氏。吉次郎也。

文政元歲次戊寅秋七月

大鹽平八郎誌且建 (背面)

形式 位牌形。碑。砂岩。高一尺九寸。幅八寸。厚七寸八分。臺石二層。御影石。上高六寸七分。下高六寸七分。

奥野小山墓

儒

所在 北區西寺町二丁目圓通院に在り。本堂の西手、中央より少し北、石燈籠の側玉垣の東にありて東西す。碑文は吳北渚の書。

形式 位牌形。碑。砂岩。高一尺八寸八分。幅八寸。厚五寸四分。臺石二層。御影石。上高八寸三分。下高七寸。

刻文

小山奥野先生墓 (正面)

先生諱純、字温夫。稱彌太郎。小山其號。奥野其姓。大阪人。爲參政遠藤侯記室。安政五年戊午八月廿日歿。享年五十九。所著小山堂詩文鈔若干卷。行于世。

辱知 生 吳 策 書 (右、背二面)

略傳

名純。字温夫。通稱彌太郎。號小山。胖庵。寸碧樓。大阪人。安政五年八月二十日歿。年五十九。

小山は篠崎小竹門下四天王の一人と稱せられ三上藩主遠藤侯の儒臣たり。其の居は鳥町二丁目松屋町を東へ入る南側にありしといふ。女弟子に棚橋絢子刃自あり。嗣子無し。著書に小山堂詩文鈔あり。

勘太郎墓

義僕



所在 南區千日前法善寺に在り。本堂裏墓地、西方、小路の北側櫛の木の西にありて西面す。蟬蛻子の撰文を刻む。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺八寸五分。幅一尺二寸。厚七寸八分。臺石二層。上砂岩。高五寸二分。下御影石。高一尺九寸二分。

刻文

義重勘太郎之碑 (正面)

見心善童子墓誌

大阪安土街有永來彦兵衛者。其子彦太郎三歲之時。始仕從者勘太郎。此者歲十一也。能弄傀儡助小兒遊戲。故愛情殊篤矣。而彦太郎八歲之時。罹疾鍼藥無効。殆屬續日。召勘太郎曰。雖先兩親乳母。是可以憂、然訣汝最悲焉。勘太郎曰。若此疾不起。則我從泉下。胡爲有永訣。君緩之。而彦太郎終天矣。勘太郎隔一兩日。弔親族。歸來入廩中。以利刀刺左脇而轉右脇。又自鳩尾剖及臍下。其刀痕如十字。

刺其咽喉之及。出腦後。乃杖其刀而死。即時達于官。檢屍官來愕曰。吾曹雖多見自殺。未會有若此勇猛所爲。感嘆之。而檢屍官告公廳。復出遺書。其文體若老成筆蹟。其文爲主人冥途從者。丹衷也。公廳感激曰。雖武臣若此希耶。況市廛家僮而少年者乎。宜弔祭矣。其父在和州。令急召至。父曰。多年恩澤豈可不然乎。因築墳墓一處於千日法善寺。此事詳新著聞集。彦太郎沒後名見了。延寶五年丁巳四月廿二日。勘太郎沒後名見心。同年同月廿四日也。永來玄亭之遺室智玄尼。貞節修身齊家。而追憶乃祖。有若此事使予書碑銘。以平日於予惻篤。不顧文拙。操禿毫誌之。其銘曰。

棄命幼主。節操惟高。聞其忠烈。忽異身毛。

明和六年四月

浪華老人 蟬 蛻 子 撰 (右、背面)

永來子後移住於雜喉場。其裔尙存。如右誌稿。卽其家之所傳也。今歲己卯春京兆入江致身翁。講道於浪速。偶聞見心之事。不堪感嘆。乃尋其墓及其家。惜此誌之



未刻。而智玄尼之志空廢。即與社友並其故家姻族等。合力新勒碑。欲寓弔祭之意。時遠近聞之者。各相隨喜而捨財不少。其事遂成矣。嗚呼見心之沒。既百四十有三年。今得翁而其名益彰矣。豈不忠烈之感乎。聊記其由。普告來者云。

文政二年己卯夏閏四月四日

土佐 刈谷 季恭 識 (左側面)

臺石正面に同志建之と刻む。

略傳

勘太郎。延寶五年四月二十四日歿。年十六。

勘太郎は大和の人年十一にして大阪安土町永來彦兵衛の家に仕ふ。彦兵衛の子彦太郎時に三歳なり。勘太郎善く之を傳して愛情殊に篤し。彦太郎八歳の時疾に罹りて鍼藥功無く將に死せんとす。乃ち勘太郎を呼んで曰く兩親に別れ乳母に離る、憂ふべしと雖も殊に汝に訣るゝは哀しと。勘太郎答へて曰く若し此の疾にして起たずんば我れ泉下に從はむ、何ぞ永訣をなさむやと。彦太郎悦ぶ。既にして死す。

勘太郎一兩日を隔て、親戚を訪うて來り主家の土藏内に入り腹を十文字に斬り咽喉を貫きて死す。遺書あり幼主に殉する旨を述べ。文章筆蹟大人の如し。檢使その死を視て武人尙及び難きをいひて嗟稱し厚く葬らしむ。其の父和州にあり報を聞いて急に至り之を見て曰く多年の恩澤宜しく然るべしと。父も亦異常の人なり。勘太郎法名見心といふ。

紙治小春墓

所在 北區西野田町大長寺に在り。本堂の前庭西側にありて東面す。

形式 地藏尊像。砂岩。高一尺七寸五分。臺石二層。御影石。上高八寸。下高一尺九寸五分。幅一尺八寸。厚一寸八寸。

刻文

最下層の臺石に左の刻文あり。



紙治墓 (正面)

法名釋了智 (左側面)  
妙春信女

◇ (背面)

略傳

紙屋治兵衛は天満十丁目筋にて紙の小賣をなせるもの、小春は曾根崎新地の遊女なり。深く契りて世間の羈を果敢なみ遂に享保五年十月十四日十夜回向終りの夜に與に網島大長寺の墓所に至りて自刃して果つ。近松門左衛之を脚色して「心中天網島」を作り同年十二月竹本座に上場し大に好評を得たりといふ。今の大長寺は最近に移轉したるなれば自刃の場所とは異なり。尙ほ二人の遺書は寺に保有すといふ。

海北若冲墓

國學

所在 東區東高津北之町無量寺に在り。本堂の階段前正面、西より第二列目にありて西面す。臺石前面に⊗の紋あり背面には垂水屋と刻めり。

形式 位牌形。碑。御影石。高二尺二寸。幅九寸八分。厚九寸七分。臺石二層。御影石。上高四寸。下高二尺二寸。

刻文

大譽千之若冲居士 (正面)

善譽本日宗珍居士 (背面)  
淨譽心應妙善信女

略傳

名若冲。峯柏。大阪人。寶曆元年十二月十七日歿。年七十七。

若冲十六七にして圓珠庵契冲に師事し古學を學びて今井似閑、野田忠肅等と共に同門の異才なり。最も萬葉集に精しく萬葉集師說五十二卷、同作者履歷九卷、同勝地篇十卷、同類林十五卷、同總類一卷の著あり。又別に和訓類林七卷を著はす。



是れ國語辭典の嚆矢にして谷川士清の和訓栞等全く之を基礎とせしといふ。

菅甘谷墓

儒

所在 東成郡鶴橋村舍利寺に在り。庫裏の背、墓所の中央にありて南面す。甘谷の死後七十一年にして藤澤東暎、碑に文無きを以て兄樂郊の撰文を刻む。書は阿部温の手に成る。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺三寸。幅一尺二寸。厚八寸五分。臺石二層。御影石。上高一尺三分。下高八寸五分。

刻文

甘谷菅先生之墓 (正面)

寶曆十四年三月廿四日。甘谷先生菅君卒。嗚呼此是徂徠物夫子之徒。能以其學鳴于浪速者也哉。先生諱晨曜。字子旭。甘谷其號。原姓藤原。星野某苗裔。中稱府

川。祖某初仕姫路侯。志好弢略。以故辭祿。之于東都。師事梅曹。窮其秘奧。以鳴於都。當時諸侯爭辟。東帛相接。邱園而不從。竟韜跡于駿河卒。父某仕岸和田侯。生二男三女。嫡某襲祿。次 先生也。女皆適侯臣。先生爲侯臣堀某義子。以承其後。堀系菅原。因冒其姓云。嘗以職事逗于東都侯邸者。二十餘年。以故從游物門。得肆其志也。性好恬退。頗有祖風。遂謝病以棲遲浪速。祇以守業先師。留情好古。自樂者二十年于茲。嚶々也。弟子日進。故已不求鳴。人實鳴之。是 先生所以鳴已。加以老益力學。抑蹶而后已歟。罹病廢業。僅五六日。忽然逝矣。年七十四。弟子某等乃承遺命。以葬于浪速城東南舍利寺境內。先生娶某氏女。先卒無子。而不復娶。先生文翰之美。高于浪速。有遺稿若干篇。

右墓誌樂郊兄氏所撰。附于 先生遺稿者。今勒之舊碑矣。

自予下帷於浪速。歲時常奉香火。而其碑僅有陽題已。乃慮後來至不知 先生爲何人。社中相議。遂有此舉也。浪速高木純。備中片岡展幹事焉。河内平池益捐貲焉。



時天保五年春三月。距 先生卒。七十一年。蓋 先生之門。有藤川東園。東園之門。有中山城山。城山門人東讚藤澤甫謹識。

浪速寓客東讚阿部温書(右、背、左三面)

略傳

名晨曜。字子旭。號甘谷。原姓府川氏。嗣堀氏。和泉岸和田人。明和元年三月二十四日歿。年七十四。

甘谷原姓は府川氏。父は岸和田藩士にして二男三女あり。甘谷はその次男なり。出で、同藩士堀某の義子となりて其の後を承く。堀氏もと菅原姓とす、故にその姓を冒す。嘗て江戸に祇役し藩邸に留まる事二十餘年、物徂徠の門に遊び古學を學ぶ。性恬退を好む。祖風に似るといふ。蓋しその祖嘗て兵法を以て江戸に鳴りしが諸侯の召に應せずその跡を駿河に韜ませるありしをいふなり。甘谷亦遂に病を以て仕を致し大阪に隱居し、唯業を先師に守り情を好古に留めて自ら楽しむも

の二十年弟子求めざるに日に進む。甘谷老いて益々學に力め病の爲に業を廢すること僅に五六日にして逝く。夫人先づ歿して子無し。復娶らず。門人に兄樂郊。田中鳴門、葛子琴、細合半齊等あり。實に大阪に護園學を傳へたる先驅者なり。

河野恕齋墓

儒

所在 南區下寺町二丁目光明寺に在り。本堂背後の丘上無緣塔の前。西側にありて東面す。弟彦謙の建つる所にして藪孤山の文を刻す。

形式 位碑形。碑。砂岩。高三尺五寸。幅一尺三寸四分。厚一尺一分。臺石二層。御影石、上高八寸。下高一尺三寸三分。

刻文

河野恕齋先生墓 (正面)

河野君伯潛墓碣

河野恕齋墓

肥後府學祭酒藪愨撰



君諱子龍。字伯潛。鶴阜。恕齋。南濱皆其別號。姓河野氏。京師宿儒龍洲先生之長男也。其先播磨網干人。有故冑岡氏數世。以至龍洲先生。命君復本姓。君生穎悟。四五歲能書能誦。十歲能詩有神童稱。龍洲先生仕于蓮池。以其耆德。優而不召。祿養其家。唯侯述職就國之次。引見逆館。咨詢疑事。侯聞君神童。併召試書試詩。應命立成。侯悅厚賞賜之。稍長其學大進。自經史百家以至稗官小說。莫不該覽。尤長文章。下筆頃刻。數百千言。宏麗雄壯汪洋無誤。而布置結構。自有法度。比至弱冠。既屹然爲大家矣。時龍洲先生名高一世。士之集京輦者。莫不走趨。退及見君。爽然自失。皆爭締交延譽。故伯潛之名。大轟于海內矣。性沈深多知。有大志。慕賈大傅。陸宣公爲人。嘗曰。君子爲學。苟不能措之事業。則非全德矣。侯新立。好學銳意政事。君獻救弊五策。侯大悅親書兌命金縢之語賜之。後侯述職次浪華十餘日。日召君講尙書。講畢賜坐。盡其所蘊。侯益悅知君果可用。遂命爲浪華邸監。尋爲留司。於是父子異任別居。眷遇兩重。人皆榮之。浪華四方之中。海運

輾焉。多富商大賈。故諸侯皆置邸。以辨糶糴貨賄之事。而監難其人。蓋昇平日久。諸侯用度寢廣。不得不取給於商賈。而商賈恐其愆忒。視有司而前卻。君爲邸吏。蒞職勤敏。遇事即斷。一邸肅然。商賈視君邸事有法。信其期約。貨貫通融。故國頻有大喪旱沴。而調度無毀。皆君之力也。藩運米八百斛不到。舟人來報曰。海上遇颶。船破穀沒。幸人命无恙。因出沿海官司勘牌。證左明白。人皆信之。君獨疑之。拘之推訊六晝夜。果得其情。蓋舟人相謀糶米壞船。欺官司。乞其勘牌耳。乃急追捕。賊賊俱獲。人皆稱神明。君之精吏事。概此類也。君用事浪華十餘年。六適藩國。再適江都。東西奔命。皆議國事也。侯嘉君功勞。將大用之。而君沒。安永己亥二月九日也。享年三十有七。葬于浪華光明寺中。君孝於父母。友於兄弟。平生著述甚多。有洪範孔傳辨正一卷。國語韋注補正二卷。韓非子解三卷。格致餘錄廿卷。儒臣傳四卷。享帚集十五卷。皆可以傳焉。娶野村氏。先死。妾生二女。無嗣。肥後敷愨曰。昔歲愨始游京師見君。時年十六。觀其文章。驚曰。世豈復有斯



人哉。異日爲海内文宗者。非子而誰。遂厚交親如兄弟。其後東西索居。君旣榮仕。懋亦絆職。交不如意。常以爲憾。今墓碣之請。豈非以懋之厚於君哉。懋知君少年之時。而不能詳筮仕之後。故文中多取福井君之狀云。嗚呼懋知君文學。而不知其政事如彼。又聞晚留心伊洛之學。則君殆不可測矣。然福井君之言曰。使君不遇於世。則經濟莫展。面本藩之用或廢矣。然優游閭閻。終身儒服。其學與德。豈止於此。幸與不幸。必有焉。福井君可謂深知君者矣。福井君名帆。字小車。京師名士。

天明四年甲辰秋九月

弟 彦 謙 立(右、背、左三面)

略傳

名子龍。字泊潛。號鶴阜。恕齋。南濱。京都人。安永八年二月九日歿。年三十七。恕齋は京師岡白駒。龍洲の長子なり。其の祖は播磨網干の人。故有りて岡氏を稱する事數世父龍洲に至る。恕齋に及んで本姓に復す。龍洲肥前蓮池藩に仕へて京師に在り。藩侯其の耆徳を尙びて優して召さず。唯參勤の途次、館に引見して疑

事を詢ふ。恕齋その次を以て藩侯に謁するを得夙にその神才を識らる。恕齋學經史百家を究め特に文章に長じ弱冠に至る比。既に屹然として大家たり。志實學を重んじ經濟を主とす。侯新に立ちて意を政事に鋭くするや救弊五策を献じ侯の嘉稱を得て説命金礦の語の親書を賜ふ。遂に用ひられ大阪邸監となり尋で留司と爲る。恕齋頗る吏務に長じ屢姦商の非を糾弾し大に績有り。大阪に在る事十餘年。六度藩國に適き再び江戸に出づ。皆國事を識する也。藩侯擧げて大に用ふる所有らんとせしに偶病みて歿す。年三十七。晩年頗る宋學に心を潜む。配野村氏、先づ死す。妾二女を生む。嗣無し。著す所に洪範孔傳辨正、國語章注補正、韓非子解、格致餘録、儒臣傳、享彙集等あり。

葛子明墓

畫

所在 南區下寺町一丁目大蓮寺に在り。本堂の南、墓門を入りて右、大寶篋印塔の南



にありて西面す。片山北海撰の碑文あり。子蛇舎の建つる所なり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺五寸。幅一尺五寸。厚九寸九分。臺石二層。御影石。上高八寸。下高九寸五分。

刻文

蛇玉葛子明之墓 (正面)

君浪華畫人也。幼學橘守國。及鶴亭禪師。後模法宋元古畫。遂立一家云。姓葛。諱季原。字子明。始名徹。號洞郭。明和丙戌二月廿二日夜。夢蛇含玉來。醒則玉在焉。不知何祥。而山是自稱蛇玉。聲價藉甚都下。好畫鯉魚。又呼爲鯉翁。其先木村宗訓。乃長門守重成叔父也。慶元之間。宗訓歸依本願法主。捐貲建妙圓・淨源・玉泉三寺。祝髮爲僧。已住玉泉寺。四代之孫曰宗琳。實生君。君其次男。故出贅長島喜右衛門。長島氏宗曰谷八氏。後其家合於長島氏。而其系出自小早川隆景子景次。君謂小早川若谷八。稱呼兩不雅馴。以谷八合音爲葛。遂爲葛氏。從君始焉。

君爲人風流閑雅。頗有游閑公子風。又籠畜數種之鳥。朝夕愛養。以爲樂。其意謂雖則籠中。而翔集飲啄。大有助意匠也。豈徒玩之。生三男二女。長男即蛇舎。專修繪事。不墜家聲云。卒于安永庚子十月廿日。距生享保乙卯正月十日。得年四十六。葬城南大蓮寺內。以所得玉殉焉。銘曰。

玉泉之永。流爲丹青。中有神蛇。含玉之靈。蛇玉出世。其聲玲々。維人維玉。藏在去局。貞珉不朽。彫勒茲銘。

越後片猷撰并書 孤子 蛇舎謹立 (背面)

略傳

名季原。字子明。初名徹。號洞郭。蛇玉。鯉翁。安永九年十月二十日歿。年四十六。

子明其の先木村重成の叔父宗訓に出づ。宗訓本願寺法主に歸依し資を投じて妙圓・淨源、玉泉三寺を建て自ら僧となりて玉泉寺に住せり。四代にして宗琳あり。子



明はその次子に當る。出で、長島喜右衛門氏を嗣ぐ。長島氏本姓を谷八といふ。子明谷八の雅ならざるを以て谷八の反切、葛を以て氏と爲す。幼にして書を橘守國守及び僧鶴亭に學び後宋元の古畫に法を模して遂に一家を立つ。人と爲り風流閑雅頗る游閑公子の風あり。三男二女。長を蛇舎といひ亦繪事を專修し家聲を墜さす。

萱野錢塘墓

詩

所在 東區西高津中寺町法雲寺に在り。本堂の背、西側にありて北面す。藪孤山撰、篠崎三島書の碑文を刻す。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺三寸一分。幅一尺二寸二分。厚九寸五分。石蓋を戴く。臺石三層。御影石。上高七寸八分。中高九寸六分。下高九寸四分。

刻文

悟徹院隻應天目居士 (正面)

萱野司馬太來章墓 (左側面)

藩置邸四。曰京師。曰江都。曰大阪。曰長崎。皆有監焉。而江阪爲劇職。職難其人。獨萱野氏監阪邸三世。世稱其職。其初世曰考澗君。篤行君子。爲監二十一年而致仕。子錢塘君嗣。錢塘君治事。一循考澗君之法。而仁厚加焉。二十六年而沒。子熙載嗣。三世一職。蓋特命云。錢塘君諱來章。字君譽。考澗君之次子也。長昌章亡。故君爲嗣。考澗君春秋既高。君以倅輔其職事數年。賞賜章服。及嗣爲監。襲食邑百五十石。別賜職俸加邑數。其後進班一。賜服增祿各再。祿至五百石。班行人。皆以恰勤功勞也。阪大都也。海運轉焉。邸置吏屬倉庫。以辨糶糴貨賄之事。故爲之監者。非寬不能以長衆。非廉多瀆於貨利。君兼二者。故一邸雍然莫有敗事矣。初考澗君開邸旁舍。名曰菁莪館。時招名儒。講經其中。至君益修焉。故不惟君子弟敦學。府吏中往往有興起者。君幼考澗君教以忠孝正直四字。拜受之。以爲



終身之符。君既二君世居大都。有文學稱。四方莫不聞名。君冲虚謙退。尊賢下士。交游日廣。每都下盛會。諸彥畢集。君必與焉。乃絃歌誦詠。恂恂如書生。篤信程朱。旁嗜聲詩。多技藝。最精弓槍劍法。天明元年十月二十六日病歿。享年五十有三。葬于法雲寺先塋之側。友人藪愨曰。考澗君父執。君兄弟交。熙載又嘗游我門。則愨之識萱野氏。亦三世矣。宜熙載有碣表之請也。而愨亦安得忍乎君哉。

熊本府學祭酒藪愨士厚撰 篠 應 道 書(右、背、二面)

略傳

名來章。字君譽。號錢塘。肥後熊本人。天明元年十月二十六日歿。年五十三。錢塘は熊本の藩士にして考澗の次子なり。兄昌章早く没せしかば錢塘父業を繼ぎ大阪藩邸守たり。衆を御する寛に事を處する廉なるを以て吏績大に舉り、屢君侯の賞を受く。父考澗邸傍に舍を開いて菁莪館と名づけ名儒を延いては經を其中に講じ藩士の進修に資せしむ。錢塘其の後を繼いで益之を修む。錢塘學は程朱を宗

とし又詩文に長ず。片山北海の混沌社に入りて聲名高し。性冲虚謙退善く賢を尊び士に下る。儒學の外、武技に長じて特に弓槍劍法を善くす。著に錢塘吟稿あり。子を熙載といふ。號謙堂。善く後を承く。

萱野謙堂墓

詩

所在 法雲寺に在り。本堂裏の中央にありて南面す。大城允撰、大槻弘書の碑文あり。  
形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺二寸八分。幅一尺二寸二分。厚九寸五分。臺石三層。御影石。上高八寸。中高九寸七分。下高七寸六分。

刻文

大悟院瑞林映雪居士 (正面)

肥藩攝邸監謙堂萱野君墓碑銘

君諱載。字汝庸。號謙堂。又號映雪。姓菅野氏。考諱來章。字君譽。號錢塘。爲



攝邸監。妣久米氏。以寶曆九年十月二日。誕君於攝邸。安永二年。靈威公賜謁於攝邸。十年命助邸監事。天明元年十月二十六日。君薨沒。二年四月君承嗣。襲邑入百五十石。秩二百五十石。凡四百石。爲邸監如父。六年賜上下服。又進班行人。八年賜上下服及絺衣。寬政五年賜袍。八年賜絺衣。皆褒其績也。享和二年七月。命到于藩。九月增賜秩百石。班次副奉行。命督度支之事。文化元年正月又到于藩。前歲。台府命以關東澹川之絲。費用巨萬。君與藏其事。賜袍及上下服勞之。十一月改秩百石爲邑入。命曰寬政以來有海濤及洪水之異。加之以。台府納金之命。不唯凶荒之災而已。耗費不啻。國用頗窮。百端盡心。繡縫匱乏。使國事無有躓者。實汝之力職是之由。二年奔命江都。時女公子歸久我公。君與有心。賜絺衣勞之。五年命到于藩。將至小倉。船覆於颶風。君援絳而漂者數里。夜半達長州藤曲。游而上岸。時君有病。加之以凍寒。其明遂終。實正月二十一日也。於是二月十九日。反葬於攝法雲寺先塋之側。享年五十。君幼聰慧。與中村雄飛友善。雄飛

第三圖



井原西鶴



亦俊異。攝人目曰。肥藩之二哲。嘗學於竹山中井先生。又從游於我數夫子。業愈進。最善詩。後益穎敏。能察事務。見利害。矧辭令。善筆翰。嘗以孝聞。幼喪母。事繼母田邊氏。如所生。其居職也嚴正。寮屬憚之。然不失其驩心。事務劇冗。書疏蝟集。應酬如流。未嘗遺漏壅滯。引接疏遠。清濁不失。君襟懷清雅。每有官暇。屢從賴千秋。葛十琴。片北梅。筱安道遊。皆一時之名士也。嘗延中井先生於藩邸。請其講說。以誘導邸中之人。是以子弟往往有向學者。君多藝能。最工於射。善槍及劍。調馬體術亦能串習。其他至若茗理歌道蹴鞠謠曲插花法。無不該能。娶成瀨氏。生一男早夭。養水足安次之第二子安義。爲子。妻以成瀨氏之姪。安義承嗣。邑入二百五十石。爲更番騎。嗚呼我先人之嘗遊於攝也。主君之家。後數祇役江戶也。往還必訪君。君之到于藩也。又必數相見。不唯有相知之舊而已。君嗣安義先人之外孫也。是以君之沒也。安義請碑文於先人。先人既諾。然未立稿而沒矣。安義請之于允。允之於君。難有瓜葛之好。索居海外。不熟其爲人。君之友人中村雄



飛之子嘉賓。偶至自攝於是。與之謀之。略述其狀。銘曰。

事親孝順。蒞官嚴肅。家和職理。內外皆服。人稱夙慧。又美老熟。加以多藝。

名聲惟覆。滔々天下。誰比其淑。天莫知耶。何數之足。

肥藩

第十一號番騎 大 城

允 撰

第十號番騎 大 槻

弘 書(右、背、左三面)

略傳

名熙載。字汝庸。號謙堂。映雪。大阪人。文化五年正月二十一日歿。年五十。

謙堂父錢塘。母久米氏家職を承けて熊本藩の大阪留守居たり。藩務を署理して著績有り。屢君侯の恩賞を得幼にして聰慧學を好み中井竹山、藪孤山に師事し特に詩に長ず。又多藝にして弓槍劍術・調馬體術より茶法歌道蹴鞠謠曲插花に至るまで該ね能くせざる無し。職に居るや嚴正屬僚之を憚る、然も其の歡心を失はず。事務繁忙、書疏蝟集するも應酬流るゝが如く未だ嘗て遺漏滯滯せず。官暇有る毎に

屢頼千秋、葛子琴、片山北海、篠崎三島の徒と交り雅遊を爲す。或は中井竹山を邸中に請じて藩士と共に經説を聴くなど又父錢塘に似たり。文化五年令によつて藩に到らんとするに途次船颶風に遭ひて轉覆し漂流の餘漸く岸に上りしも病身に加ふるに凍寒を以てし遂に逝く。

葛子琴墓

詩

所在 北區東寺町栗東寺に在り。本堂裏、井戸の東北にありて南面す、碑文は岡元風の撰篠崎三島の書に成る。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺八寸。幅一尺一分。厚九寸九分。臺石二層。上砂岩。高五寸。下御影石。高七寸。

刻文

蠶庵葛先生之墓 (正面)

葛子琴墓



葛君子琴亡。襄事後。其外甥僧雪舫。請余以銘。余曰。吾忍銘斯人邪。雖然斯人而吾何辭也。歎歎久之。乃序而銘之。君諱張。子琴其字。號蠹庵。橋木氏。葛城爲本姓。家世業醫。其先玄甫。以瘍科仕三齋細川侯。爲侯見知遇。祖考真相仕青山侯于尼崎。及侯移封宮津。而罷仕來住浪華。遂爲浪華人。考貞淳。醫聞于府下。妣天野氏。君夙孤。爲父弟子確井逸翁所保鞠。少爲學穎悟。好賦詩。嘗學劍生光芒。文思大進。弱冠遊京。京儒先見而奇之。君志氣飄舉。將歷遊海內。逸翁不可。居閱歲歸而治業。時逸翁既老。君敬養奉事備至。而君之好詩也益甚。與府下諸名士結社。往來日驩。家在玉江上。樓名御風。宜觀月。每值中秋之節。讌會連夕。歲以爲常。暇則出尋佳山水。到處吟哦。作數日遊。君資性瀟散韻雅懷曠。而情陶。其詩清新婉約。才不掩巧。而趣入於真。實卓然一家擅於時者也。於是子琴之名。藉藉著聞京攝。延及它州。詩笛來屬。求與之交。乃醫治亦傳稱云。天明甲辰五月七日卒。年四十六。葬天滿栗東寺先人墓側。配大城氏。子男二人。曰萬壽。

始九歲。曰萬福。尙在襁褓。女子三人。長適鹽川氏。一幼一天。君爲人溫厚。其待故舊。多可稱行。又善與人交。凡詞席雅集。有請輒往。欣然杯酌。必盡其驩。席次客有論詩。談鋒互起。君傾耳而聽。若不能者。偶詰難及己。則辨對一二。間以奇謔。使至絕倒。而噱笑。間有一詩出。觀者咸服其妙。恒曰。人何苦才長相抗也。我則娛于此已。卒之日。知與不知。莫不哀惜之。嗚呼余與君相識三十年。情交最厚。君少於余二歲。嘗屢顧余託兒子。今而思之。君之壽竟不永夫。集若干卷。藏于家。銘曰。

性之攸發詩邪。質之善而才之奇。繫名弗淪。徵諸玄珉。

浪華岡元鳳撰

筱應道書(右、背、左、三面)

略傳

名張。字子琴。號蠹庵。橋木氏。本姓葛城氏。大阪人。天明四年五月七日歿。年



四十六。

子琴の家世、醫を業とす。祖父真相、尼崎青山侯に仕ふ。侯の宮津に移封せらるゝや致仕して大阪に住み遂に家す。父を貞淳といひ亦醫を以て都下に聞ゆ。母天野氏。子琴早く父を喪ひ父の門人碓井逸翁に養はる。儒を菅甘谷、兄樂郊等に學びて物氏の學を承け、片山北海の混沌詩社に入つては詩才を以て社盟第一の評あり。頼山陽之を謂つて曰く「茫々混沌新穿竅、唯有聰明葛子琴」と、玉江橋畔に樓を構へ扁して御風樓といふ。詩賦唱和の所として特に中秋明月の夜詞人會同を以て名有り。子琴詩を以て稱せらるゝも曾に詩のみにあらず左傳に於て深き造詣あり。醫に於ては能く難經、素問に通じなほ書を能くし横笛、笙、筆、筆、筆、筆に達し篆刻亦妙なり。配大城氏、子女各々三人有り。長男萬壽名は膺、鳳齋と號し後を嗣ぎしが幾もなくして歿す。長女は鹽川氏に適く。著に葛氏漫草。小園摘語、御風樓集等あり。

片山北海墓

儒

所在 東區八丁目中寺町梅松院に在り。本堂裏墓門を入りてすぐ西、中央、右手にありて南面す。北海と同門の友なる僧竺常の撰、彼崎三島の書の碑文あり。

形式 位牌形。碑、砂岩。高二尺九寸五分。幅一尺二寸九分。厚九寸九分。臺石三層。上砂岩。高六寸。中御影石。高一尺二寸。下御影石。高七寸五分。

刻文

北海片先生之墓 (正面)

君諱猷。字孝秩。姓片山。修爲片氏。越後新潟人。故以北海號。家世爲農。父默翁。母三村氏。蚤亡。君生岐嶷聰敏。比十歲。族人某授以四書。不二句便通。無誤句讀。皆以爲不凡。使爲書生。而僻區無師友之資。年十八遊學于京。心無所可。獨慕宇士新先生之業。而從之。先生亦器之。使侍側。未幾先生歿矣。君益落莫無



聊。父亦挈家來就。朝夕殆不給。君辛勤克奉其驩。學亦日進。浪華有一二遊字先生之門者。因以招君。遂占居浪華。父亦因以終焉。君爲人間靖寡欲。不與世競。未嘗以表襮措心。然內充而外著。名日藉甚。海內知字先生之業者。莫不知君。以故行束脩以上者。比々不絕。性好音樂。善笛。其伎蓋不下伶官云。又嗜茶事。有雅澹之賞。君既閑靖無意乎當世。然至於論經濟。推古今。辦事當否。未嘗不察々中肯綮焉。其與人交。似簡濶。方其有故也。未嘗不輸誠而歛。是君之素也。泉之岡部侯。每有朝鮮之聘。例司浪華公館。必用文儒供其應接。於是欲辟君充其職。而知君不肯官。苦以客禮召之。君亦悅觀光之美也應之。愛其廩給。嘗曰。我雖貧哉。孰與吾字先生之貧哉。家人以君老且病。請用帛易布被。君却之曰。吾嘗養親不能極輕煖之足於體。今吾曷以是爲。因忽淚數行下。其秉心也如斯。寬政二年庚戌。臥病彌留。至九月二十二日卒。距生享保八年乙巳。得年六十有八。葬城南之梅松院。有遺文若干卷。君晚娶河原氏。先沒無子。養平井氏名蘊者爲後。亦爲存

父之祀也已。於是蘊持其狀。謁余志其墓碣。余嘗從字先生學文。乃與君相交。四十年如一日也。道雖不同。於其所執。未嘗不相謀。凡有著作。莫不相詠悅其同調。今也則亡。寧無有無質之嘆乎哉。且字先生之門。獨有君。而今則亡矣。孰可志其墓者。乃爾使余。余也方外人。何以文爲。且余老於君五歲。不圖後於君。而志其墓也。唯其相知深且久。莫余如也。誼不可辭。乃銘之。曰。

嗚呼北海。萬里而南。橋梓厥偕。旣安且滿。存于此喪于此。復何招魂于彼。

淡海 竺 常 謹 撰

浪華 筱 應 道 謹 書 右 背 左 三 面

夫人之墓はその右鄰に在りて南面す。

圓臺慈鏡墓 (正面)

河原氏。武庫郡圓德寺圓巖姉也。歸於片猷。有女爲無子。乃贅茨木平井氏子恭順爲嗣。寬政庚戌五月八日卒。享年五十九。(背 面)



北海の父の墓は夫人墓の右隣にありて南面す。

默翁居士墓 (正面)

居士姓片。諱吉林。小字甚左衛門。越後新潟人。徙居浪華。寶曆己卯十二月二十九日卒。享年六十七。葬城南梅松禪院裏。

孤子猷謹立 (背面)

### 略傳

名猷。字孝秩。號北海。越後新潟人。寛政二年九月二十二日歿。年六十八。

北海家世々新潟の農にして父を默翁といひ母を三村氏とす。早く死す。北海生れて異稟あり十歳の頃族人授くるに四書を以てせしに二句ならずして即ち通じ句讀を誤る無し。皆以て非凡となす。年十八京師に遊び宇野明霞の門に入る。明霞之を器とし側に侍せしむ。然るに幾もなくして師の死に遇ふ。北海落莫無聊。父亦家を携へて來り就くあり。窮乏益々極まると雖も善く之に奉事し其の學又日に進

む。偶々大阪に同門の士あり之を招くや遂に大阪に移り住む。父亦因て以て其の生を終ふ。北海の雄飛實に此の時を以て始まり、明和初年詩社混沌社を起すや一時の名士四方より集り、其の居平野町淀屋橋筋なる孤松館は當時、竹山、履軒の懷徳書院と對峙して正に浪華文學極盛の時代を現出したり。寛政の三博士此の社に雌伏し頼春水、春風、篠崎三島、葛子琴等皆その詩の批評を此の人に待つ。人と爲り間靖寡慾、世と競はず専ら根柢の學力を進むるに努めしかば名自ら著はれ、門に及ぶの士正に三千人と稱せらる。又緒餘、音樂を好み笛を善くす。其の技俗人に勝り又茶事を嗜む。岸和田侯岡部氏が朝鮮人來聘の任を司るや客禮を以て北海を招じ之が應接の事に當らしむ。北海因て以て其の廩給を受く。嘗て曰く「我れ貧なりと雖も吾が宇先生の貧にいづれぞや」と又その老い且つ病むを以て絹蒲團を布被に代へんと勸むるあり、則ち之を却けて曰く「吾れ嘗て親を養ひて輕煖の體に足るを極むる能はず。今吾れ曷んぞ之を以て爲さん」と因つて忽ち淚數行



下りしといふ。晩く河原氏を娶る。先づ歿して子無し。平井蘊を養つて後嗣とす。著書に北海文集、尺牘、詩集、混沌詩稿、孤松館雜記等あり。皆門人の編輯になる。

金谷三石墓

畫

所在 西成郡木川村正通院に在り。本堂の背。東北隅にありて南面す。男興忠の建つる所にして中村健撰鼎元新書の碑文あり。

形式 位牌形。碑、砂岩。高二尺二寸。幅八寸二分。厚八寸一分。臺石三層。上砂岩。高三寸五分。中御影石。高八寸三分。下御影石。高九寸六分。

刻文

興般居士之墓 (正面)

金谷君子般墓誌録

君諱興般。字子般。號三石。原姓平松氏。備岡山人。世爲名族。出後于金谷氏。遂爲浪華人也。府下街坊。蓋六百餘。分爲三郷。曰北部。曰南部。曰天滿部。北南各置市長五員。天滿置三員。以統坊正。金谷氏之先。世爲天滿部市長。至君以奉職謹慎。陞南部。時人以爲榮。君爲人溫雅謹素。才藻卓異。頗涉儒學。錯綜技藝。至箏曲蹴鞠。莫不窮其妙。而最著畫。祖南蘋沈氏。嘗祇役于長崎。從繡江熊斐。學花鳥。而山水人物。則自出機軸。但他技或作或輟。至于畫。則旦夜以此終。是以畫名鬱興。請者接踵。天明中。府尹阿部侯遊觀之日。特召君席上命畫。大見褒賞云。寛政六年五月廿二日疾卒。享年六十三。葬于木寺邨正通禪院。義父三左衛門信行。義母中邨氏。君前配信行女。先亡有一女。適岡山入江氏。後娶淺井氏。生二男三女。長曰興忠。好學有文思。次曰興秀。女皆幼。銘曰。此君之室。以藏以守。億萬斯年。畫名不朽。

浪華 中 邨 健 撰



鼎元新書

孝子 金谷興忠 建(右背、左三面)

略傳

名興般。字子般。號三石。通稱清右衛門。原姓平松氏。嗣金谷氏。備前岡山人。寬政六年五月二十二日歿。年六十三。

三石もと備前岡山の名族平松氏にして出で、大阪天滿組總年寄金谷三左衛門信行の養嗣となる。義母中村氏。三石養家の職を襲ひて恪勤なりしかば陞つて南組の長と爲る。時人以て榮と爲す。甚書を好んで沈南蘋を宗とす。嘗て長崎に至り熊斐に就て花鳥山水人物の畫法を學び自ら機軸を出す。頗る才藻あり儒學に涉り技藝に達するも遂に畫に於て最も卓異、以て一家を成す。天明中 府尹阿部侯遊觀の日特に召されて席上畫く所あり褒賞せられしと云ふ。前配金谷氏、先づ歿して一女有り岡山の人入江氏に嫁す。後配淺井氏、二男三女を生む。長を興忠といひ

次を興秀といふ。

金谷興詩墓

國學

所在 木川村正通院に在り。本堂裏、東北隅、金谷三石墓の西北にありて北面す。

中井碩果の碑文あり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺一寸二分 幅八寸。厚八寸。臺石二層。上砂岩。高四寸七分。下御影石。高一尺五寸二分。

刻文

金谷興詩之墓 (正面)

君金谷氏。諱興詩。字立禮。號遷齋。稱興右衛門。世爲大阪南部郷長。考三石君。妣淺井氏。爲人明敏抗直。不脂韋苟合。覃思職事。陳疏民疾苦。乞罷徵金不納。憂憤發心疾。辭職。家居十八年矣。以天保六年乙未六月十四日卒。年六十二。塋



于不寺邨正通蘭若先塋之次。君幼好學。受業於中邨韋庵先生。旁嗜國詩。師伴蒿蹊翁。著詠歌大概抄箋。又撰八代集・國詩義抄勸戒者。纂修難波津百首・三芳塋百首二編。得張文定詩訓遺意云。娶上田氏。有四子。長永盈代父受職。次興孝。次興弟。先卒。次直道爲同僚永瀨氏義子。爲之銘。曰。

家積千金。如遺善言。多財賈禍。明訓全身。手編古詩。勸戒孔明。可觀可興。稱君之名。

天保七年丙申莫春

大阪府庠懷惠書院教授

中井曾 縮 撰(右、背、左三面)

略傳

名興詩。字立禮。號遷齋。通稱與右衛門。大阪人。天保六年六月十四日歿。年六十二。

興詩父を三石と曰ひ母は淺井氏。三石の碑に長曰興忠といふもの即ち興詩の初名

なるべし。父の職を繼いで大阪南組の總年寄たりしが性明敏抗直、嘗て民の爲に謀つて上に納れられず、遂に憂悶疾を發して職を辭す。少くして學を好み儒を中村韋庵に學び和歌を伴蒿蹊に承けて和歌に巧なり。著書に詠歌大概抄箋あり。又八代集中勸戒の意に成る和歌を選んで難波津百首三芳野百首二編を纂修せり。配上田氏。四子有り。長を永盈といひ其の後を嗣ぐ。次は興孝次は興弟先づ歿す。季を直道といふ。出で、永瀨氏の嗣となる。

加藤竹里墓

國學

所在 南區天王寺夕陽丘町珊瑚寺に在り。本堂の西側上段の墓地、東側第一列中央にありて東面す。中井竹山の撰文あり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺四分。幅六寸一分。厚四寸一分。臺石。砂岩。高三寸二分。



刻文

竹里加藤翁之墓 (正面)

維寬政八年丙辰十月十日。竹里翁告終。享年七十有七。塋在大阪府下珊瑚蘭若。廼叙其梗槩。以繫碑陰。曰。翁諱景範。字子常。稱友輔。竹里其號。姓加藤氏。世爲府人。考禹門。妣樋口氏。翁天資溫粹。與弟子寅孝奉二親。色養弗懈。友愛亦切至。御家勤儉。其業大興。而自奉泊如。世以爲皆不可企及焉。夙齡嚮學。執卷於懷德書院。頗涉羣籍。能反諸約。受書法于萬年先生。得入室之妙。學國字于富永芳春氏。成出藍之美。詩文之業。亦列乎懷德社盟。尤善國詩。高攀八代之隆。詞流推服。以爲絕才。又長於國文。厭咀紀勢紫赤之筆。別出機軸。雄渾正大。縱橫獨步。來者幾亡繼也。所著選綜述。國字之書多矣。其成編者。虛詞考。實踐集。藏山集。濱苞。名所續松。水馴楫。已布于世。萬葉趨避。國雅管窺。古今通補。源語解。和歌和文集若干卷。藏于家。三妻皆不育。而義子敦善克家。故中年傳事。所在

優游。文雅自適。以終云。

邑人 中井積善撰 (右背左三面)

尙竹里遺愛碑は東區西高津中寺町法雲寺に在り。本堂の背後上段の墓地、東壁の側、南より數基目にありて西面す。刻文左の如し。

竹里加藤翁遺物表 (正面)

寶政中翁之歿。藏于府南珊瑚寺。而又別瘞其遺品于法雲寺中。其家上樹吾竹山祖氏誌碑。而珊瑚寺墓上却不誌焉。蓋不知其由也。及翁之孫季得。欲徒誌碑于珊瑚寺而止。今茲庚申秋。其玄孫伯宜。追繼祖意。遂以徙焉。遺物冢上。俾予書其顛末。以表焉云。

萬延紀元庚申八月

並河鳳來撰 (右左二面)

寬政八年丙辰十月十日終 (背面)

略傳

加藤竹里墓

107



名景範。字子常。通稱友輔。號竹里。大阪人。寛政八年十月十日歿。年七十七。竹里父を禹門といひ母を樋口氏とす。弟景亮と與に善く二親に事へ勤儉産を治め家業(藥種業)又大に興る。夙に懷徳書院に學び中井竹山と最も親厚あり。書法を三宅萬年に學び假字の書法を富永芳春に受けて並に出藍の譽あり。詩文を善くし尤も和歌和文に長ず。著す所虚字考、實踐集、藏山集、濱苞、名所續松、水馴棹等あり世に布く。萬葉趨避、國雅管窺、古今通補、源語解等稿成りて家に藏す。尙竹里の死後嗣子棠齋遺編を輯めて文集を國詞叢録、歌集を秋霜親筆と名づけて淨書し以て住吉神社の文庫に藏むといふ。三たび娶つて子ありしも皆育たず。辻氏の子を養つて嗣とす。即棠齋是なり。又能く家學を受く。

附 加藤禹門同棠齋墓

禹門墓は珊瑚寺竹里墓の背にありて西面し、棠齋墓は珊瑚寺本堂背、最下段の

墓地、東より第一列や、北方にありて東面す。

禹門加藤翁之墓 (正面)

翁諱信成。字子原。禹門其號。晚更稱季朔。大坂人。曾祖考宗味君。嘗仕内府織田公尾州。後大坂居焉。祖考了夢君。祖妣入江氏。考清順君。妣山添氏。翁自幼志學。游五井持軒・三宅萬年・三輪執齋三先生之門。又受醫方後藤長山先生。遂以爲業。晚年築休々亭隱焉。娶樋口氏。生男景範・景亮・及一女。貞享四年丁卯十二月朔生。寛延四年辛未閏六月四日終。年六十五。葬于城南珊瑚寺先塋之次。(右、背二面)

春峯女之墓 (正面) 禹門碑の左。

女諱美年。父加藤景範。母入氏。延享四年丁卯八月五日生。寶曆十年庚辰二月廿一日終。年十四。葬于城南珊瑚寺先塋之次。(背面)

榮順媪樋口氏之墓 (正面) 春峯女碑の左



安永五年丙申十二月十八日終 (背面)

棠齋加藤翁之墓 (正面)

翁諱敦善。字子元。棠齋其號。幼名新藏。後稱喜太郎。晚節更名原助。世大阪人。辻和常君第三子也。幼時爲加藤竹里君所養。終承其後。娶入氏。生二女。養其姻松井氏之子以翼爲嗣。以長女配焉。季女旣夭。最後後舉一男。曰鴻漸。少長分親。開藥肆于松坊。竹里君之卒。翁惜先公遺艸散逸不傳。收拾積年。秩然成編。名和文章。曰國詞業錄。名和歌集。曰秋霜親筆。淨書以藏于墨祠神庫。又手寫一本。貽子孫。翁圖不朽。可謂勞且至矣。翁夙受家學。能和歌。有集藏于家。元文六年辛酉二月二十八日生。文化十二年乙亥八月二十三日終。年七十五。葬于城南珊瑚寺。(右背左三面)

岳玉淵墓

書

所在 東區西高津中寺町禪林寺に在り。墓門入口右手にありて南面す。碑銘は奥田元繼の撰文、森川竹窓の篆額、谷口莊の隸書に成る。男衡の建つる所也。

形式 位牌形。碑。砂岩。高四尺七寸。幅一尺九寸。厚一尺一寸。臺石二層。御影石。上高一尺。下高七寸五分。

刻文

九疑先生碑 (篆額)

浪華之間。近世以能書聞者。獨有岳孔庸。資性簡默。抱淵閎之才。諤々不阿焉。其先亦門望之家。系於鎌倉修理大夫景盛。始領讚州岡田。其後景道出仕片桐某。以岡田爲氏也。亡幾致仕。來於泉州居之。遂家於浪華中島。蓬累不一焉。逮六世裔景長。復趨東都。游於官途。以順簡書。然不傍門戶。不事營求焉。孔庸即其適也。傷乎夙喪母。保育於祖父源七景房。生二十五年。肇分門戶。更姓岳氏。常觀篆隸古文。獨攻之。以爲樂焉。但恫書學之不講。流習成弊。世人或不知古保章氏



所掌。竟爲何物也。於是自謂與其強要名聞也。寧從吾所好。尋秦漢諸名跡。而極其要訣。纏々不能休焉。特涵泳禊帖淳妙。心手和調。誠無遺恨矣。故所論不涉六朝以下。然但於李陽冰三墳記。則竊有所觀。而深詣其奧矣。旁參考夢英字原一書。逮年老。輒篆其古篆論。上于石焉。適至會悟之處。天然風姿。如悉出于己者。於書家拒獲。雖絲毫差繆。必瞭然不假。惠于世之學者。不鮮焉。則皆中心所嗜。非自外鑠之類矣。其起落轉換。毫無窘束之感。所謂字中有筆。信然。故士大夫展賞。臻市塵牌頗。索書者夥矣。君諱庸。學孔庸。九疑門人弟子所崇稱也。別號鼎文。或稱玉淵子。夙妻池田氏。舉一男。名衡。字湯臣。從南都古梅園。多藏墨筆文具。弘禱於世矣。惜夫君不永於世。寬政戊午十一月十二日。病卒於牖下。距生元文丁巳二月十二日。享壽六十二。慟哭之餘襄事。葬於中寺街禪林寺先塋。衡及門人等。詳狀其生平請銘。々曰。

奎文效象。攻古惟新。業勉乎己。名普在人。斯籀眇跡。遠泝周秦。議論懇到。

長契貞珉。

寬政十一年己未夏六月

播州 奥田元繼撰

男 衡建

森 世黃篆

谷 口莊隸 (正、右二面)

略傳

名庸。字孔庸。號玉淵。鼎文。私諡曰九疑。原姓岡田氏。大阪人。寬政十年十一月十二日歿。年六十二。

玉淵其先鎌倉修理大夫景盛に出づ。初め讚岐岡田を領す故に岡田を以て氏とす。其の後景道に至り片桐侯に仕へしが致仕して和泉に來り更に大阪中の島に移りて家す。六世の後景長に至りて後江戸に赴き官途に遊び筆札を事とす。玉淵は其の



嫡也。夙に母を喪ひ祖父に養育せられ二十五歳初めて門戸を分ち岳氏を以て姓とす。常に志を書道に寄せ殊に篆隸古文を専攻するを以て樂しみ秦漢の諸名蹟を尋ね其の要訣を極む。心手調亦遺恨なきに至る。論ずる所常に六朝以下に下らず、唯李陽冰の三墳記に於ては竊かに觀る所あり而して深く其の奥に詣る。傍ら夢英の字原一書を參考す。晩年其の古篆論を石に上し篆書もて記せるに誠に摹倣の態を脱し一に悉くその心寫なるが如し。法を論するや心解融合するありその妙諦を了悟し字を作るや些の窘束なく所謂字中筆有るといふもの、士大夫より始めて賈人に至るまで書を索むる者玉淵の門に於てす。配池田氏、一子有り衡といふ。字は湯臣、奈良古梅園に嗣として筆黒文具を鬻ぐ。

桂田龍山墓

醫

所在 東區清堀町天然寺に在り。墓門を入りて中央の筋の西端より數步東、左側

の樹の下にありて東面す。源貞龍撰平思齋書の碑文あり。

形式 位牌形。牌。砂岩。高二尺六寸五分。幅一尺四寸。厚一尺四寸。臺石。自然石（御影石）高二尺二寸。

刻文

桂田龍山翁墓（正面）

龍山先生墓誌

先生諱棟吉。姓桂田。其先近江神崎人。歷世稱郷處士。織田内府公。嘗有過其廬云。先生之先考諱棟政。好學。以庶子始卜居於大阪。蓋大阪府庠之興也。與有力焉。有二男。先生其次子也。及先考沒也。長子別爲商賈。而先生嗣其家。性多病。業醫。寡欲質實。信而好古。慨然有濟世之志。節儉自守。身不衣帛。口不重味。家無長物晏如也。殆有太古之風。有餘材。則買書施人。洒然不吝。嘗憂風俗之陵遲。探國典考古禮。以訓示人。所著有照類通義・元和餘慶・年中行事考等。皆未脫稿。



矣。先生以寛延二年七月生。文化七年庚午二月十日病終于家。享年六十有二矣。葬於府城南天然寺中。門人等私謚曰龍山先生。先生娶長谷川氏。生一女。配以毛利氏之子。以奉厥祭祀云。

岩文化七庚午歲

源貞龍謹誌

平思齋敬書 (右背、左、三面)

略傳 名棟吉。私謚曰龍山。大阪人。文化七年二月十日歿。年六十二。

龍山の先は近江神崎郷の處士なり。父を棟政といひ庶子を以て始めて大阪に移住す。懷徳書院設立に與つて力有り。二子あり、龍山はその次子にして父の歿後長子の別れて商賈となるや其の嗣を承く。性多病にして醫を業とす。寡慾質實濟世の志有り身を持する節約餘資有れば書を買ひ人に施して洒然者ます。嘗て風俗の頽廢を憂へ國典を探り古禮を考へ人に訓示せり。著書に照類通義、元和餘慶、年中行事考等あれども皆未だ稿を脱せずして終る。配長谷川氏。一女を生む。毛利

氏の子に配して其の後を繼がしむ。

### 香川氷仙墓

畫

所在 東區小橋寺町大應寺に在り。本堂前の墓地、西北、塀側、八木巽處墓の右隣にありて西面す。

形式 位牌形。碑。砂岩。高一尺九寸。幅七寸三分。厚五寸五分。臺石二層。御影石。上高六寸五分。下高七寸五分。

刻文

香川氷仙之墓 (正面)

文化十二亥十一月廿五日卒 (左側面)

八木兵太妻 (右側面)

略傳



名園葵。字不淑。(一曰字秋草)。文化十二年十一月二十五日歿。享年未詳。  
氷仙は八木巽處の室にして書を善くし特に美人畫に於て名有り。姉を芝園と號す。  
書家森川竹窓の配なり。

各務文獻墓

醫

所在 南區天王寺夕陽丘町淨春寺に在り。墓門を入りてすぐ南、左側にありて西面す。  
形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺一寸三分。幅一寸二分。厚七寸六分。臺石二層。  
御影石。上高九寸七分。下高六寸二分。

刻文

歸一堂各務先生之墓 (正面)

先生諱文獻。字子徵。姓各務。稱相二。其先赤穂淺野侯臣也。先生少而慷慨有濟世志。將壯學醫。攻內外科及產科。既而曰。醫之事博矣。而諸科不少其人。唯整

骨一科。古來未聞有精焉者也。乃盡舍所學。專力研究。期於必得。乃號其居。曰歸一。以自誓。遂有所發揮。著爲一書。名曰整骨新書。書成罹病。在褥數歲。猶益覃其思。復著補遺二卷。又嘗命工刻木像骨。以資於治術。四肢百骸。關節運動之所由。莫不完備矣。今茲文政己卯春。獻之官。官命置諸躋壽館醫院。尋有賞賜焉。乃喜曰。吾志願畢矣。秋末病篤。以十月十四日歿。葬蛇坂常春寺。年六十有五。妻黒井氏。生一男一女。男先天。女今尙幼。養門人中山樹子爲嗣。銘曰。  
人百其術。君則歸一。可以無朽。驗人述筆。(背面)

種月院心桂榮茂大姉 (正面) 歸一堂碑の背、東面

大姉黒井氏。各務子徵之配也。子徵以整骨術成一家。大姉亦學其術。每助家業。子徵沒後。義子尙少。大姉施治術。不墜家聲。及義子長。悉傳其術。今方三世盛行。大姉之功亦偉矣。弘化乙巳九月三日病歿。享年七十。葬天王寺村淨春寺先塋之側。

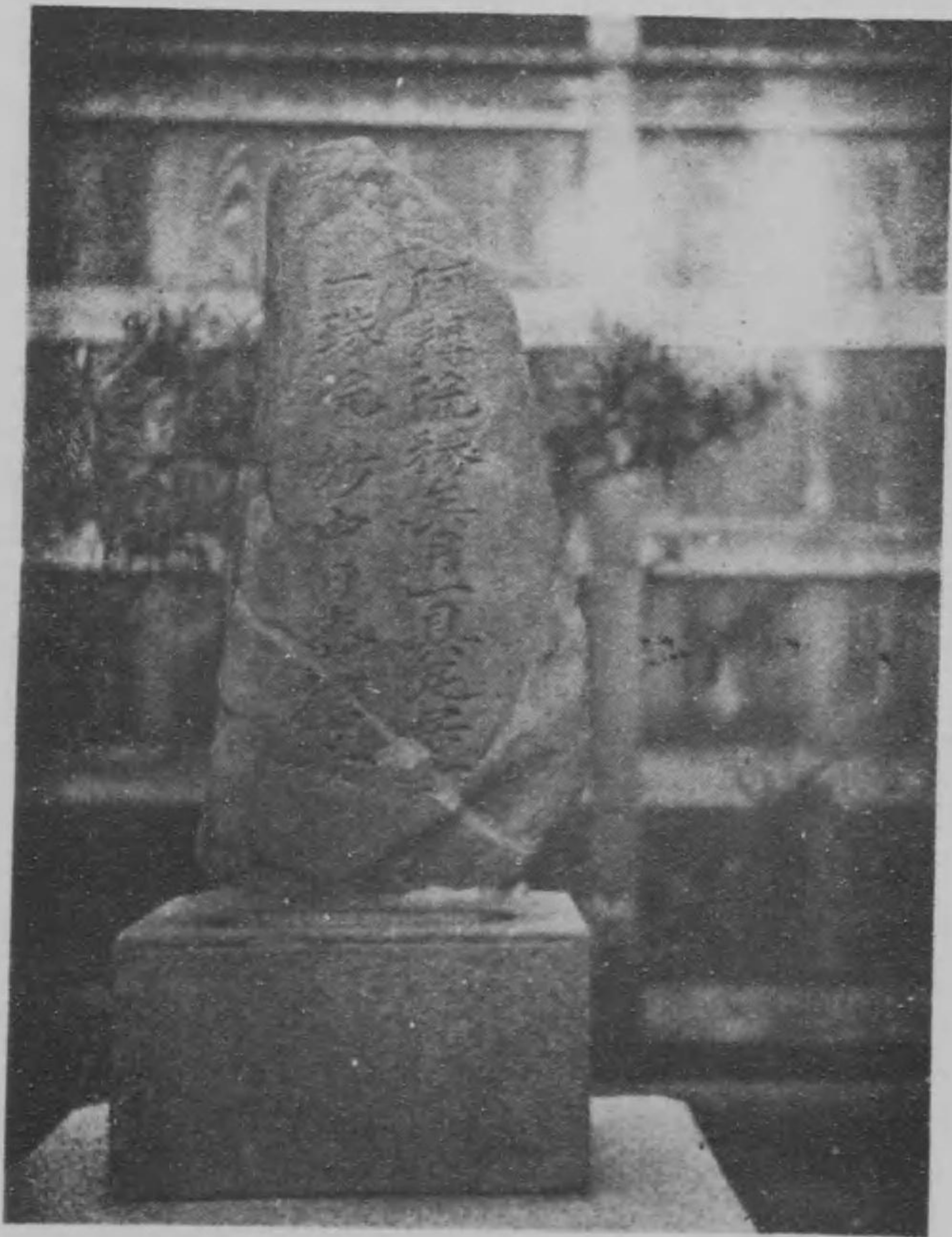
齋藤 淳 撰 篠崎 弼 書 (背面)



畧傳

名文獻。字子徵。稱相一。號歸一堂。大阪人。文政二年十月十四日歿。年六十五。文獻初め醫に志し内科外科及び産科を修めしが、既にして曰く醫の事は博し、而して諸科其の人に少からず唯整骨の一科は古來未だ精しき者有るを聞かす。即ち盡く學ぶ所を捨て専心研究自ら其の居を歸一と號し以て深く嘗ふ。爾後數年大に得る所有り。而して其の整骨術に於ける先づ其の物を明にして後その治術を盡さんと欲し屢刑屍に就て自ら之を剖視す。又徒に授くるに眞骨を以てするの利を知るも之を求むるの難きを以て工匠に命じて木像骨を刻ましめ手撫自察諸生研鑽の用に充つ。文政二年之を官に献せしに官之を躋壽館醫院に置き廣く斯界に資し尋で文獻に賞賜あり。著はす所の整骨新書三卷は整骨科の又我國醫方中に一要部を占むべきものなるを知らしめたる大著たり。配黒井氏、一男一女を生む男先づ天す。門人中山樹子を養うて嗣となす。

第 四 圖



近松門左衛門



香川琴橋墓

儒

所在 北區西寺町一丁目蟠龍寺に在り。本堂前東より二列目中央にありて東面す。  
男袒の建つる所にして篠崎小竹の碑文あり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高一尺九寸四分。幅七寸八分。厚五寸。臺石二層。御影石。上高五寸三分。下高一尺五寸三分。

刻文

琴橋香川先生之墓 (正面)

先生諱徽。字公琴。號琴橋。稱一郎。藝州人。北川氏。幼從父五介君。來大阪。爲通家香川子硯翁所養。以善書繼翁業。從琴溪劉翁。名聲稍振。徒弟滿塾。阪城加番 倉候。東町奉行戸塚君。皆延教授其郎君。嘉永二年己酉十月十八日病沒。年五十六。葬天滿蟠龍寺。妻高井氏。生四男三女。長子袒嗣焉。



篠崎弼撰並書 (左、右二面)

略傳

名徽。字公琴。號琴橋。通稱一郎。原姓北川氏。嗣香川氏。安藝人。嘉永二年十月十八日歿。年五十六。

琴橋は安藝の人北川氏にして父五介と共に大阪に來り香川子硯に養はれ書を善くするを以て其の後を繼ぐ。劉琴溪に學び業成りて後帷を今橋の畔に下し徒を延く。城代倉橋侯・東町奉行戸塚氏等時に琴橋を招いて其の子弟に授けしむ。著に浪華名勝帖あり。配高井氏四男三女を生む。長子昶、麗橋と號し善く家業を受く。

金子雪操墓

畫

所在 南區天王寺勝山通一丁目清壽院に在り。門を入りて右にありて北面す。初め筆塚として自ら築きし處、死後門弟子等その遺骸を此に埋む。藤澤東暎の銘あり。

形式 碑。自然石。(綠泥片岩)高二尺六寸五分。幅三尺一寸。厚九寸五分。臺石。

自然石(御影石)高一尺四寸。

刻文

筆塚

江都雪操金美寓浪華。瘞退筆於是。安政丁巳歲自誌。

自誌之後。無幾病歿。歲之八月五日也。春秋六十有四。門人相謀。併瘞其柩。銘曰。

墨跡在世。精神踊躍。泉下所藏。維其精柏。

藤澤甫書 (正面)

略傳

名大美。字不言。號雪操。各半。有情痴者。美翁。原姓大塚氏。嗣金子氏。江戸人。安政四年八月五日歿。年六十四。

雪操は幕府の士大塚某の子なり。金子氏の養子となる。幼にして伊勢長島城主増



山雪齋の近侍たりしが雪齋に就て書を學び其の神を得たり。雪齋喜んで之に號を賜ひ雪操と名づけしむ。後致仕薙髮して各半道人又は塵海漁者と號し更に書を劔雲泉に受けて其の妙を極む。中年京に住み書法を加茂の書家某に得後大阪に移り堂島櫻橋の裏長屋に住む。此の時最も貧窮す。而も諛を權貴に求めず其の道を樂しんで晏如たり。藤澤東暎、八木巽處等と最も親善常に訪ひて易理を談せしといふ。天保八年吹田村の井内左門、雪操の人と爲りを愛し迎へて家に居らしむ。是に於て髮を蓄へ妻を娶る、子無し。晩年再び大阪に出で釣鐘町に住みて徒に授けしが從ひ學ぶ者多く鼎金城、桑田墨莊等の異ヲを出せり。遂に此の地に歿す。又詩を善くして大窪詩佛に學びしも妄に作らず。(瀨華人物誌)

**北山壽安墓**

醫

所在 南區六萬體町太平寺に在り。本堂の西側にありて南面せり。

形式 不動明王の石像にして高さ七尺弱。

刻文

石像の背面腰部に左の刻文あり。

等身石像

爾生前是誰

吾死後是誰

截斷死和生

爾吾空也耳

北山友松子

竝題

略傳

名道長。通稱壽安。號友松子。仁壽庵。逃禪堂。肥前長崎人。元祿十四年三月十



五日歿。享年未詳。

壽安父は支那閩州の人馬榮宇、母は長崎丸山の遊女樋口氏、壽安氏を北山と改め少にして歸化僧化林、獨立の二人に就て醫を學び鼎湖の神書を受け又張仲景の秘術を獲て求めに隨ひ治を施すに皆驗あり。未だ三十ならずして東遊伎を試む。大阪の庶民之を喜ぶや移り住みて醫療を事とす。當時醫の奉ずる所主として李東垣、朱丹溪の窩窟を出でざるに壽安張仲景を宗とし下明末の諸家を採る。我邦張氏の法を用ふる壽安を以て嚆矢となす。壽安學問浩博、卜筮風鑑地理等より禪理に至るまで該通せざるなし。性濶達にして言を出すに毫も顧慮せず故に人或は以て狂となし直となす。著はす所に刪補衆方規矩、評議纂言方考、増廣口訣集、方考繩愆等あり。皆四十未滿の時成す所といふ。子先づ歿し弟子その業をつぐ。

紀海音墓

戯曲

所在 東區上本町六丁目寶樹寺に在り。墓門を入りて左、本堂の裏にありて南面す。鯛屋貞因と同一の碑にして海音の子忠七の建つる所なり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺。幅八寸七分。厚八寸三分。臺石。御影石。高一尺八寸。

刻文

妙法清潮院海音日法  
月慶院妙隆日幸 (正面)

享保十五庚戌年九月二日

貞因正清壽妙了  
妙法因道休樹性教念  
久有智清教心淨慶  
妙智了心教善淨玄 (右側面)

夏知善  
妙法知惠通心幻善  
秋延享元子二月廿二日 (左側面)

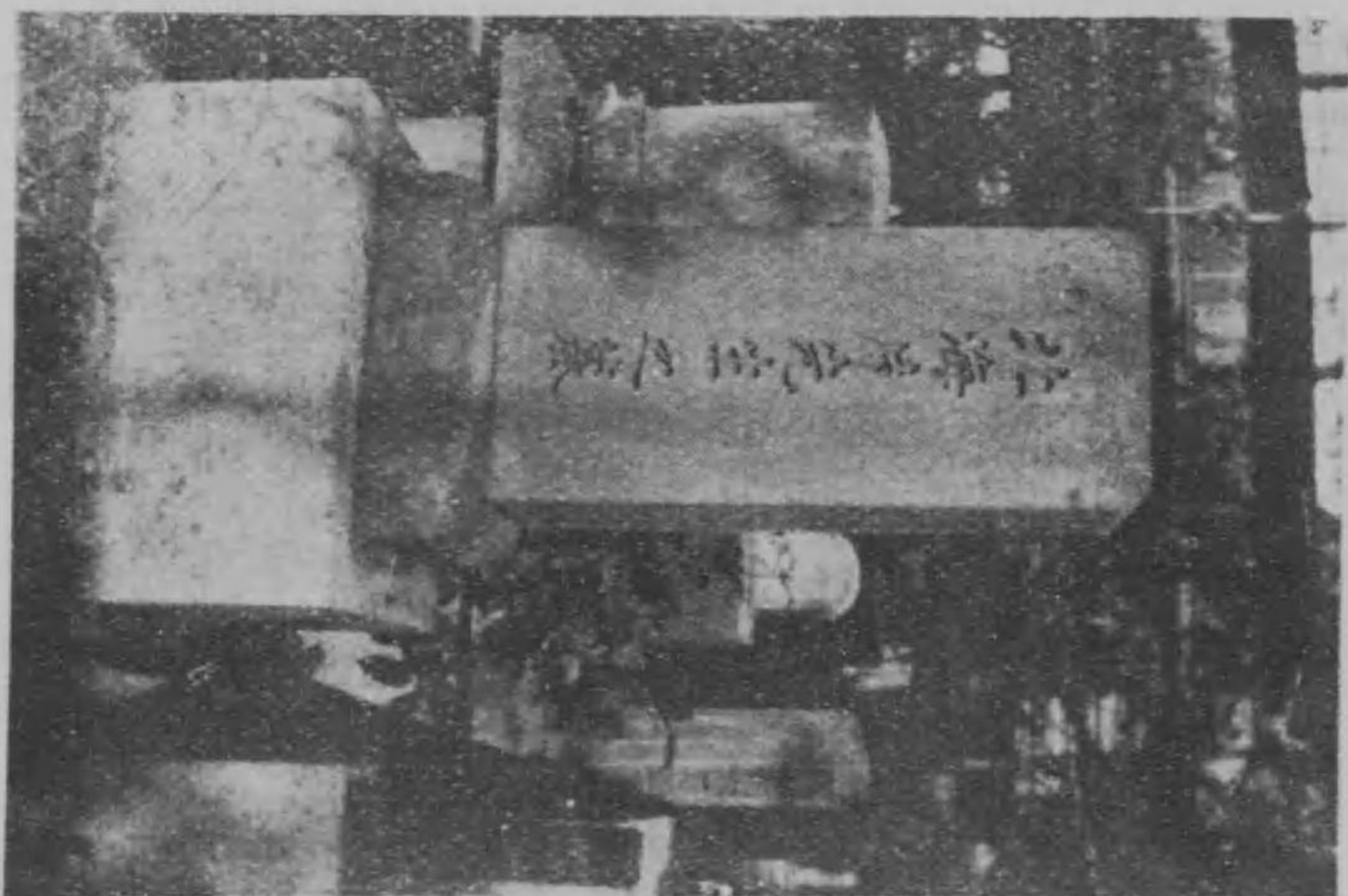


略傳

通稱鯛屋喜左衛門。後阪善八。姓榎並氏。號貞峨。紀海音。法號清潮院海音日法。大阪人。寛保二年十月四日歿。年八十。

海音は俳人榎並貞因の子にして狂歌師油煙齋貞柳を兄とす。家は世々太左衛門橋筋の菓子商たり。壯にして深く黄蘗宗に歸依し大和柿本寺に入り悦山和尚に參じ名を高節といひて禪家の修業を積み大阪に歸り來つて後は醫を業とせり。又圓珠菴契沖の門に遊びて契因、鳥路觀と號し國學に通じ後に紀海音と號して西澤一風の門人となり戯曲に筆を染む。専ら豊竹越前少掾の爲に淨瑠璃を作り正に竹本座付の作者近松巢林子と相拮抗す。海音が戯曲に於ける處女作は元祿十二年三十七歳にして「傾城懷子」を作れるに始まりて爾後浪華劇壇に立つ事二十五年、享保八年「傾城無間鐘」の作を最後として劇壇を辭す。其の傑作に八百屋お七歌祭文傾城國性爺、心中二腹帶、油屋お染袂の白綾、鎌倉三代記等あり。又狂歌を兄貞

圖 六 第



海北山片

圖 五 第



島三崎篠



柳に就きて學び名を貞峨といふ。晩年又剃髮して元文元年七十四歳にして法橋に叙せらる。子忠七號を貞風といふ。

玉雲齋貞右墓

狂歌

所在 南區逢坂上ノ町一心寺に在り。本堂の南三成庵の前、南檐下にありて東面す。姪勝照、孫勝芳の建つる所にして片山北海の撰文及び貞右自筆の辭世を刻む。臺石前面に尼屋彌兵衛とあり。

形式 位牌形。碑。御影石。高三尺一寸八分。幅一尺二寸一分。厚一尺二寸一分。臺石三層。御影石。上高六寸五分。中高二尺一寸四分。下高八寸七分。

刻文

玉雲齋貞右居士墓 (正面)

詩有俳諧體。倭歌亦襲其名。其俳諧而最俚諺者。名曰與歌。唯其俚諺。故不待匡



鼎。善解人頤。滑稽風諭之旨。不無小補於世道也。而不審何人創造焉。天和貞享年間。山城豐藏坊法印信海。其作絕妙。膾炙人口。門人永田貞柳善嗣徵音。聲價增高。法印以塵拂文臺爲衣鉢。傳之貞柳。貞柳傳之安藝芥川貞佐。貞佐傳之於君。君姓雄崎氏。諱勝房。稱國丸。以享保甲寅中秋生。實貞柳下世全同其物。一日貞佐自藝致書曰。子之意匠。幾出先師之右。宜稱貞右。以證衣鉢。天明辛丑冬烏丸光祖公賜十題。君乃賦奉呈。公賞之又賜玉雲齋額字。玉雲者信海別號。而副傳法以相授受云。於是門人日進。至一千三百人。而高足稱某丸者。又四百人許。蓋丸之言麻呂也。麻呂古物之美稱。如言帖木兒之類歟。遂分結六社。擇高足六人爲祭酒。各領一社。每月一會。卷成君判裁之。彬々人以爲盛集矣。寬政庚戌二月廿四日病卒。享年五十七歲。一子勝淨分居。以姪勝賢爲嗣。先卒。男勝芳尙幼。故伯父勝照保護之。建石于坂松山一心寺。請銘于予。因銘。銘曰。

誰謂俚而不雅。解頤開口。滑稽爲政。納約自牖。誰謂今而不古。解紛排難。和樂成趣。俚雅雖異。其致一揆。桃投李報。其從如水。若可幾及。亦若末由。布護圓滿。謂之玉雲之流。

寬政二年歲次庚戌夏四月

越後 片猷孝秩甫撰並書

姪勝照孫勝芳謹建 (右背二面)

叔父玉雲齋五とせのむかしさつきなかは病ふになやみて

定つた所しやことし五十三めい日も亦五月十三

かく詠してのちすてに事されなんとせしか夜すから蛤貝をもて薬を用ひければ翌るあしたやゝ心よきとて

なきからと云はれはせしな蛤のかひある薬命すくふて

とよめる言の葉の聞えければふたたび生れ出られし思ひに悦ひしか其かひもなくことしきさらきするの四日に身まかられる枕に残る水莖の跡を其まゝこゝにう



つすものならし

雄崎勝照謹誌

辭世

一たんは藥に治して而てのちにさするは定る壽命しや

玉雲齋貞右 (左側面)

略傳

名勝房。通稱尼屋市兵衛。初號混沌軒國丸。後號玉雲齋貞右。姓雄崎氏。大阪人。寛政二年二月二十四日歿。年五十七。

貞右は鯛屋貞柳の門人芥川貞佐に師事し狂歌を以て家を成す。貞佐嘗て書を致して曰く子の意匠幾んど先師の右に出づ宜しく貞右と稱し以て衣鉢を證すべしと。天明元年冬烏丸光祖卿十題を課せらるゝに應じて之を賦し奉呈す。卿之を賞し又玉雲齋の額字を賜ふ。玉雲は信海法印の別號にして傳法に副へて相授受するものなり。門に集る者一千三百人、高足にして某丸と稱する者四百人、聲譽郡下に施

く。男勝淨別居し姪勝賢を以て嗣となせしも先づ卒す。勝賢の子を勝芳となす。其の嗣たり。

木村巽齋墓

本草

所在 東區小橋寺町大應寺に在り。門を入りてすぐ北側、西より第三列目にありて東面す。増山雪齋の撰並書になる碑文あり。

形式 位牌形。碑。砂岩。高三尺三寸五分。幅一尺二寸。厚一尺一寸八分。臺石。御影石。高二尺。

刻文

兼葭翁之墓 (正面)

兼葭翁墓表、

兼葭翁名孔恭。字世肅。姓木村氏。浪速堀江人也。浪速以有兼葭之古跡。因堂號

木村巽齋墓



兼葭。於是世人呼翁曰兼葭翁。翁質直而忠信。博學而多通。其志寬優。而莫與世人不交者。就中博窮山海所產之物。以爲其樂。傍玩書畫。殊妙於畫山水矣。嘗有他邦之客訪之。則晤言談論。終日不倦。或問文學者。或問武術者。或問書者。或問畫者。於產物於故事。於雅於俗。各莫不答者。日以繼夜。夜以繼日。書翰往來無有暇日。四方之旅客到浪速之地者。無雅俗必先訪兼葭堂。如此者凡四五十年。而莫有疲倦之色者。京師浪速。自古名藝園者多出。雖名聞海內。然通達萬事者少矣。近讀畸人傳。大都各達一二事耳。如翁之考古計今。而通達萬事者。古今最少矣。翁向遊崎舉。試唐山之風俗。歸後每隨黃蘗山大成禪師遊。若人有問唐山之風俗於禪師者。卽答云。翁能知之。不須費吾談云。蓋雖禪師者唐山之產。來本邦而住于黃蘗。然不及翁之不見不到。而玩考陰察。仔細於唐山之風俗。是亦可一笑也。於此世人以爲唐山樣風流之祖。余夙有忘年之交。後有故客居於弊邑長洲。常同床而臥。同机而語。於此乎得能知翁。翁又能通本邦之學。其他地理街區。名山奇勝。盡爲圖以

藏之。又能記憶之。所不到其地者亦如到。所不見者亦如見。東武叡麓有井貫流者。面貌甚奇。雖然世人不知者多矣。翁竊介其隣家人。而求圖。貫流聞之大喜。備書家作圖以贈云。其多通好事。以此一事可知也。蓋於翁若不知之者。爲多端迂癡。以笑之。若知之者。爲丁寧欸密。以貴之。有一妻。有一妾。有女子一人。和睦善事之。可謂不失雍熙之軌也。翁祖爲後藤隱岐守基次。戰死河洲道明寺。子吉右衛門基房學醫術。號玄哲。遊于京師。而仕近衛殿下。爲醫官。其子玄篤紹箕裘焉。玄篤之弟五助芳雅。芳雅子七郎兵衛芳矩。芳矩子延助芳昌。芳昌子吉右衛門重周。重周繼浪華木村重直之家。翁者乃重周子也。元文元年丙辰十一月二十八日生。享和二年壬戌正月二十五日終。享年六十有七。銘曰。

兼葭兼葭。不知卽爲荻。知卽爲兼葭。此難波與伊勢。邦言二州。本是同花。

享和二年歲次壬戌夏四月十八日

巢丘小隱雪齋會君選撰並書 (右、背、左、三面)



## 略傳

名孔恭。字世肅。號巽齋。兼葭堂。通稱坪井屋多吉郎。大阪人。享和二年正月二十五日歿。年六十七。

巽齋は北堀江瓶橋畔の造酒家坪井屋の主人なり。兼葭堂の號を以て喧傳せらる。博學多通特に物産學に長じて其の蘊奥を極む。初め津島桂庵に就きて草花を問ひ後小野蘭山に従遊して學愈深し。或は戸田旭山等と謀りて京阪の間に物産會を開き或は書を著はして弘く斯界に資す。巽齋又奇玩珍品を蒐むるにつとむ。其の堂に集まる所書畫骨董草木鳥獸樂器奇書珍籍あらゆる種類を網羅す。巽齋之を博物界に提供し書畫界に開放し文學界に紹介して益する所至大。實に當時文明の恩人なり。又頗る畫を善くし初め大岡春卜に就きて狩野派の畫を學びしが後南畫を好み柳里恭に僧鶴亭に學びて畫名亦高し。後年田能村竹田出で、推稱止まず、若し年を斯の人に假し予をして門下に従遊せしめ以て指授を得しめば、憲や不才なるも

猶或は古人の萬一を髣髴せむ。噫」と、又書に篆刻に達す。詩文は之を片山北海に學びて混沌社盟の雄たり。巽齋學ぶ所多方従つて交游多面に亘つて頗る博し。巽齋が好古癖愈進んで家産又傾かんとするに至り擧げて人に譲り己れは高麗橋筋の居に移り住みしに寛政元年家業を委したる人、釀酒定額の新令に觸れて罪に抵るや巽齋亦それに坐して問責を受く。偶伊勢長島の城主増山雪齋其の所領の一部を與へて之を招きしかば遂に家を携へて至る。幾くもなくして又大阪に歸來し文具を鬻ぎわしが享和二年遂に此の地に歿す。二代目吉右衛門名は孔陽字は世輝石居と號し善く後を嗣ぐ。著に山海名産圖會。一角纂考、周易鄭氏注、易乾鑿度、周易口訣義、唐土名勝圖會、銅器來由私考、其他甚多し。雪齋の碑文は多く其の逸事を載す。

## 衣川長秋墓

國學

所在 東區餌差町圓珠庵に在り。奥庭、契沖墓所の南側、域内に入りてすぐ右側、



東面す。本居大平の碑文を刻む。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺六寸。幅一尺二分。厚一尺二分。臺石。御影石。  
高一尺二寸。

刻文

衣川長秋奥墓 (正面)

衣川宰記源長秋主波伊勢國壹志郡那須川里池田某乃子也所由有而衣川家乎嗣留奈利本生池田氏波吾本居族也此主波寛政三年鈴屋翁乃教子登成亘古學麻那備得而後鳥取殿爾奈毛仕良禮計留其殿人乎始因幡伯耆乃國人等爾初而古學歌學教傳多留波此主乃功爾奈毛有計留登會雅名瓊齋號玖一年秋頃京爾上亘在計留間冬頃病發而急計玖不愈而翌年正月教子中島豐足賀浪華乃旅居爾徒寓利亘終爾身罷良禮奴其日波文政五年二月十日年五十八歲葬禮留地波高津圓珠菴契沖阿闍梨乃墓乃側即此所也言置禮多流爾依亘奈利因幡伯耆乃國人等乃豐足爾言傳亘吾許乞於己勢多流麻爾

麻爾如此言也。

本居大平 (右側面)

畧傳

名長秋。通稱宰記。直記。號瓊齋。原姓池田氏。繼衣川氏。伊勢人。文政五年二月十日歿。年五十八。

長秋は伊勢一志郡須川村池田某の子にして衣川氏の養嗣子となる。寛政三年二十七歳にして本居宣長の門に學ぶ。學成りて同門の士國本道男が其の故郷因幡藩の爲に國學振作の任を憇憑するあり。長秋鳥取に至りて子弟に授く。此に於て鳥取の國學大に開け歌道又盛に行はる。遂に藩主之を擧げて國學教授となし銀若干を給與す。長秋此の間或は伯耆に入り或は出雲に至りしが到る處大に歡待せらる。又屢々京阪の地に出遊し文政四年上京冬頃より病みて翌五年正月門生なる中島豐足の大阪の寓居に訪れ居しが終に歿せり。門人飯田秀雄等議して高津彦瓊齋帶根大人と號し遺命の儘に之を圓珠庵契沖の墓側に葬る。配某氏。亦和歌を善くす。



實子を源太郎といふ。鍼醫を業とす。長谷の社司桐林某の子廣滋を養うて後嗣としたりしも久しからずして歿す。著書に百人一首峰の梯、和讀要領辨、新古今集解、金槐集解、田箒の日記、屋伴れ箒の日記、大同類聚方校等あり。(勢陽學報)

北尾墨香墓

書 賈

所在 東區八丁目東寺町天龍院に在り。墓門を入りてすぐ南、東より第二列にありて東面す。後藤松陰の碑文あり。

形式 位牌形。牌。砂岩。高二尺三分。幅七寸四分。厚七寸一分。臺石三層。上。砂岩。高五寸五分。中御影石。高一尺四寸七分。下御影石。高七寸二分。

刻文

墨香巢居善士  
有道貞誠善女 墓 (正面)

善士姓北尾。俗稱禹三郎。以鬻書爲業。嘉永六年癸丑十二月十二日病歿。年四十五。葬東生天龍院。法號巢居墨香居士。頗讀書作字造畫。非尋常商估之流。始娶大谷氏。先沒。後娶池田氏。

甲寅正月

後藤 機 誌 (右側面)

善女大谷氏。北尾禹之妻也。生三女。弘化四年丁未正月廿五日病沒。年三十二。葬東成天龍院。善女上事姑及夫。下育兒女。接物溫柔。婉而能儉。婦德無缺。沒日人皆惜之。予與禹交久。故爲誌其墓。

是歲秋七月

筱崎 弼書 (左側面)

天保六年  
通善童子靈  
二月廿八日

(背面)

惠岳智光信女

安政二卯年  
五月廿四日

北尾墨香墓



略傳

俗稱禹三郎。號墨香。大阪人。嘉永六年十二月十二日歿。年四十五。墨香は心齋橋筋安土町に住して書賈を業とす。頗る書を読み字を能くし又畫に巧なり。浪華四時雜詞、攝西六家詩抄、攝東七家詩鈔等を刊行して當時の浪華文壇に益する所至大なり。初配大谷氏先づ歿し後池田氏を娶る。

花月庵鶴翁墓

茶

所在 南區天王寺阿倍野筋一丁目邦福寺にあり。本堂前。西南にありて東面す。

形式 位牌形。碑。砂岩。高二尺九寸五分。幅一尺五寸五分。厚一尺二分。臺石二層。御影石。上高二尺五分。下高七寸。

刻文

花月庵鶴翁墓 (正面)

略傳

名元長。號花月庵鶴翁。菊井館。姓田中氏。大阪人。嘉永元年八月二十二日歿。年六十七。

鶴翁は大阪清水町に住し釀造を業とす。宅中に井あり舊名を浪華清水といひ後に菊の清水と改む。此の水を以て酒を製し其の名を菊之井といふ。夙に賣茶翁の風を慕ひ煎茶を好み別に一家を成して其の名最も藉甚す。又和歌を香川景樹に學んで名を賀壽と呼び詠歌に巧みに黄蘗の聞中禪師に參禪しては毛孔の號あり。天保三年江戸に遊び平田篤胤、大窪詩佛、谷文晁等と交り綾瀬川邊に茶筵を設け同好の諸名家と相樂しむ。同九年一條家の召に應じて京に至り式禮によりて諸卿に茶を薦め榮譽を荷ふ。鶴翁風雅の心深く嘗て支那西湖の水を得たりと稱しては之を壺に藏封し淀川の底に沈め永く浪華の人をしてその流を汲ましむるなりといふ。又邦福寺内に急須塚を設けて世の同感の士をして急須の破片を納めしむ。(因に云ふ此